

とある関西人の幻想入り

どっかの主

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日のこと。現世に嫌気がさしていた彼はある少女に会う。『幻想郷に来てみな
い?』と誘われたのであつた。そもそも幻想郷がどんな場所かわからず、ましてや彼に
は心に大きな傷を負っていた為少女の言うことさえも信用せず追い返してしまう。そ
れでも毎日訪ねてくる彼はついに怒りの頂点に達し、少女を殺害しようとするもなだめ
られ、少女に対して彼は距離を縮めていくのであつた。後日、彼を誘った張本人・八雲
紫が、『スキマ』を使って彼を幻想郷へと誘つたのだつた。そして彼は、幻想郷にて様々
な人々と出会い、心を開いていき、八雲紫から与えられたトンデモ能力で異変を解決し
ていく――。

当小説は、東方 project と投稿主の脳内で勝手に考えた二次創作作品となつております。原作崩壊等を招いてしまうこともありますが、もし読んで頂けたら幸いです！

目 次

とある関西人の幻想入りPart 0 (八 雲紫との出会い①)	1	とある関西人の幻想入りPart 0 (八 雲紫との出会い②)	5	とある関西人の幻想入りPart 0 (八 雲紫との出会い③)	11	とある関西人の幻想入りPart 2 (八 雲紫との出会い④)	21	とある関西人の幻想入りPart 3 (幻 想郷での異変①)	28	とある関西人の幻想入りPart 4 (幻 想郷での異変②)	36	とある関西人の幻想入りPart 5 (幻 想郷での異変③)	41
想郷での異変④)	41	とある関西人の幻想入りPart 7 (幻 想郷での異変⑤)	50	とある関西人の幻想入り (キャラ紹介①)	64	とある関西人の幻想入りPart 8 (幻 想郷での異変⑥)	71	とある関西人の幻想入りPart 9 (幻 想郷での異変⑦)	71	とある関西人の幻想入りPart 10 (紅魔館での日常①)	91	とある関西人の幻想入りPart 11 (紅魔館での日常②)	105

とある関西人の幻想入りPart0（八雲紫との出会い

①

「毎日疲れるわ」

俺は仕事帰りにいつもの居酒屋で一杯引つ掛けていたらいつの間にかそう言つたら
しい。

「毎日仕事お疲れ様です。どうですか？最近の調子は」

そう話しかけてくれたのは居酒屋のお姉さん。一人で来て行き付けになつてから
かすぐ覚えてもらえたのである。何とも言われへん

「相変わらずですわ。それにたまに思うんですよ、この世に嫌気がさしてゐるな～って」

そう、過去にさんざんな裏切り、別れ等を経験しているから思つてしまふ。現世から
消えたいと。

「相当ストレス溜まつてゐみたいですね。タバコの本数も増えた気がしますよ？吸いす
ぎはあまりよくないですからね？」

・・・酒飲みのヘビースモーカーの俺は言い返さなかつた。なぜなら言われてること
が正しいので。

「まあ、消費税も上がるみたいやし1箱1000円になつたらやめますわ。そもそも20代でラーク吸つてる人あんまおらんでしようし上がつてもしれでますよ。」

「あら、本当は10代から吸つてるのに？」

「なんでやねん。それは言わんといてくれよ・・・」

ヤンキーでもないのに10代から吸うとはどうなつてるんやと思われてもしゃーないかもな。（皆さん是酒、タバコは20歳になつてからですよ？さもないと親とかに迷惑かかりまっせ）

「ねーちゃん、鳥皮の塩だれ5本とだし巻きとから揚げと生中で。」

「いつも通りのメニューね。わかつたわ。」

「あ、追加でサラダも」

「はーい。」

1時間くらいで平らげたのである。（追加で生中2本目突入したのは内緒）

「ほなねーちゃん、また来ますわ〜。」

「はーい、1500円よ」

「うい、ほなちょうどで」

「じゃ、明日も仕事頑張つてね〜」

「うーい、ねーちゃんも無理せんと休みや〜」

「ありがとうね♪」

こうして帰路へ着くのだった

・・・ある少女とすれ違うまでは

「タバコが無いやんけ、しゃーないからそこのコンビニでカートン♪と買うか」

そしてコンビニへ赴こうとするが、ある人を見るなりこう思つた

(えらい恰好してはるな、こんな時間にコスプレか? ま、好きなんやろな。つーか俺の家方面に向かつたけどあんな奴見たことないで? 今度会つたら声でもかけてみるか。可愛かつたし)

と、わずか0・7秒で思ったのだ

「15番のカートンを2つ」

「少々お待ちください」

(帰つて洗濯物せなあかんな)

「お待たせしました。お会計9000円になります」

「万券しかないから1万円で」

「1万円お預かりします。お釣りが1000円のお返しです」

「ありがとうございました」

「ありがとうございました♪」

(明日行きや次の日休みやし、布団でも干すか)

「さつきの人？なんで俺の家の前に？」

家に入ろうと思つたらさつきすれ違つた人が家の前におる。どういう事や
「あの、すんません。うちに用あります？」

「ごめんなさい。貴方の家ですか？」

「そうですよ」

「初めまして、私は八雲紫。以後お見知りおきを」

こうして、一人の少女と出会つたことによつて俺の生活等が激変するのであつた。

序章・一人の少女との出会い

とある関西人の幻想入りPart1（八雲紫との出会い

②)

俺は混乱していた

目の前におる少女が何で俺の家の前におるのか。そして俺の名前を全部当てやがつたから。

「あら、どうかなさいまして？」

「どうかなさいまして？は俺のセリフじや。つか何で俺の名前を知ってるんや？初対面やのに、怖いわ」

「あら、怖いだなんてひどいわ。あの時可愛いって思つてくれたのは嘘だつたの？」

「あの時つて…、まさか俺の思つてたこと全部知つてるんか？」

「ふふ、どうかしら。それに貴方、幻想郷に来てみない？」

「ハ？ 言うてることが冗談抜きでわからんしわかつたとしてもんな所行かへんから」

「あら、どうしてなの？」

「オマエがいくら美少女でも信用なんざ出来るか。帰れ、俺は明日も仕事なんや」

「あら残念。まあいいわ、また来るからね」

「いや来んでええわ。何しに来んねん」

「貴方が幻想郷に行くって言うまでよ」

「アホとちやうか、さつさと帰れ」

「また明日来るわ」

(次来た時警察呼ぶか)

こうして彼の生活はこの日を境に変わっていく。

ある休日

「(ダ)きげんよう」

「なにしつれつとつづーか堂々と俺ん家入つてんの? 何しに来たん?」

「昨日言つたじやない、貴方を幻想郷に連れていくのよ」

「いや帰れよ。まささ、俺行かへん言うたやん。人の話聞いてた?」

「聞いてたわよ。そもそも貴方にしか声をかけてないのよ? この意味わかるかしら?」
「いやわからん

そんなこんな言い合いしてるうちに俺の腹が鳴った

「ぐ〜」

「… そういう朝何も食つてねえな」

「あら、お腹が空いてるのね」

「ああ、近所のスーパーで買つてくるから。オマエは何を食うんや?」

「あら、買いに行かなくても大丈夫よ」

「オイそれってどういう…」

「なんと、目玉がギョロギョロして氣味の悪い物体から弁当やお菓子、果てには酒やタバコまで出したのだ。

「なあ、今何? どつから出した? スーパーからパクつたんか?」

「これはスキマつていうものよ。これがあればどこにいても好きな物とかいろんな物が取れるのよ」

「いや、どこの四次元ポケットやねん…。あ、タバコありがとうよ」

「いいえ、どういたしまして」

「ところでさ、どつから持つてきたんや?」

「ふふ、内緒よ。ま、詳しいことは近くのスーパーに行つてごらんなさい」

「やっぱスーパーからパクつて来てんじやねえか! どないすんねん…」

「まあ、私がどうにかするわ」

「できんのか?」

「もちろんよ。私に任せてちようだいな」

「大丈夫かよ…」

「一度騙されたと思つてスーパーへ行つてござらんなさい」

「絶対わーわー言うとるわ…」

スーパーに到着した彼。当然店内では…

「おい！いきなり変なものが出てきて弁当とか何個も持つてかれたぞ！どうなつてんねん！」

「こつちは金麦のケースが5箱も無くなつたわよ！」

「こつちも在庫であつた赤ラーカのショートのカートンが何十個と無くなつてるぞ…！」

店内は予想通りわちやわちやしてました

「疲れる…。どないすんねん、あの女は」

彼が呟いた瞬間、不思議なことが起きたのである

「いや、やつぱり気のせいや。申し訳ない」

「こちらもです。すみませんでした」

「こつちもです。私の勘違いね…」

「…は？待て、何がどないなつてんねん」

帰宅後

「おい、俺が店着いたらギャーギャー騒いでたのが一瞬で勘違いだの何だの言うてたで

？ 何したん？」

「私の能力で記憶を少しいじつたのよ」

「なんつー能力や…」

「私の能力？境界を操る程度の能力よ」

「…シンプルに考えたら恐ろしいな。間違った方向に使つたら内臓抉り出されそうや
わ」

「使い方次第では不可能なことは無いわよ？」

「アンタ妖怪だろ？」

「あら、どうして？」

「そりやそうやろ、普通の人間がそんな大層な能力なんざ持つてへんからな」

「ふふふ、よくわかつたわね。そうよ、私は大妖怪でもあり幻想郷の管理人よ」

「ほんで、幻想郷の管理人が何で俺んとこに？」

「貴方にお願いがあつて來たのよ」

「さいですか、とりま帰つてくれ。眠いんや」

「あら、私と一緒に寝る？」

「アホか」

「私の体を見て何とも思わないの？」

「胸がでかくてスタイルのええ美少女」

「そこまで言うなんて…。嬉しいわ」

「ん、ほな帰りなはれ」

「わかつたわ。明日も来るからね」

「なんでまた…」

彼は半分嬉しいながらも半分恐怖を感じていたのである。

そう、また裏切られるのではと

第一章・八雲繁

とある関西人の幻想入りPart2（八雲紫との出会い

③)

ある日の仕事帰り

（あの女、何で俺に対してあんな事するんやろか…）

彼はそう思いながらいつもの居酒屋へ赴く

「まいど！」

「あら、お疲れ様。今日は早く終わつたのね」

「まあな。とりあえずいつものメニュープラスサラダで

「はーい。あ、ビールは何本行つとく？」

「3杯で」

「わかつたわ」

「お待たせ」

「ありがとうな」

「ところで、昨日けつたいな客が来たわよ？」

「どんな客なん？」

「明らかにコスプレの格好だつたわよ？ しかもあなたの事を話してたみたいだし…。 もしかして知り合い？」

「この地点で思った。あの女、どうやつても俺を幻想郷とやらに連れて行く気やと

「いや、知らんて俺は」

「あら、 そうなの？」

「うん。 ところでねーちゃん、 その女は何を話してたんや？」

「そうねー、 貴方と一緒にどこかへ行くとか何とか。 私もあんま聞いてなかつたからわ
からないわ」

「そうか、 ありがとうな」

「ええ、 ちなみに明日行つたら次の日休みだつけ？」

「せやで、 どないしたん？」

「ううん、 何でもないよ」

「さいでつか笑」

(デート何て私が恥ずかしくて誘えない…)

「ほなねーちゃん、 おあいそで」

「ほーい、 今日は3500円ね」

「うい、 今日もちようどあつたわ」

「ありがとうね。また来てね」

「ああ、わかつた。ほなねーちゃん、気を付けてな」

（帰りしなに散髪屋寄つて帰ろ）

青年移動＆散髪中…

「あー、さつぱりした。さつさと帰つてごくせん見よ」

青年帰宅中…

「ただいま、つつても誰もおらんから言つても無駄やな…」

「あら、おかえりなさい」

「おう、ただいま、つてなんで俺の家にさも当たり前のようにおるん?」

「私の能力で入つたわよ?」

「マジで使い方間違てるし平氣で不法侵入とか何考えてんねん。つーか出ていけ」

「えー、私行く当てがないのよ?」

「ネカフエ行けや」

「この世界のお金が無いのよ?」

「ほなどうやつて今まで生活してきたんや」

「スキマでチヨチヨイのパーよ」

「どつかの某アクションゲームのへんてこなお面が言いそうなセリフやなオイ」

アクアク 「解せぬ」

「とりあえず、ハツキリ言うてええか?」

「何かしら」

「なんでそこまでして俺に構うん? そこもよーわからへんしましてや俺に対しての態度もおかしいんや」

「あら、私は貴方と一緒に幻想郷へ」

「そこもよーわからへん」

「……」

「オマエさ、俺のことどない思つてんの?」

「私はね、貴方を助けに来たの。それに幻想郷の異変も少しばかり解決して欲しくてそれで貴方を誘つたのよ。逆に貴方は私をどう思つてるのかしら?」

「そう言われ、彼の頭の中は錯乱していた。何で俺を助ける? 異変を少しばかり解決? ワレで解決しろや。助けるって言うた奴ら全員俺を裏切ったことも知らんくせに?!」「貴方は私と関わりたくないの?」

「そうだよ、関わりたくないし今すぐ出てつてくれ

「一度いいから幻想郷にきてちようだいな」

「うるさい……!」

「…貴方？」

もう俺に構うな…！

モウ裏切ラレルノハ嫌ダ

「ねえ貴方？」

黙れ…、俺を呼ぶな…！

「どうしたの？ 貴方」

「…せえ」

「え？ どうしたの？」

「うるせえつってんのが聞こえへんのか！ アア？」

「え…」

「俺はオマエが怖いんや！ 普通に話しかけてもそのうち裏切るんやろうなつて思つたら
だんだん関わりたくも無くなるんじや！ こつちは！」

突然立ち上がり、手にした日本刀で紫に斬りかかる

「コロシテヤル」

ドスの効いた声でそうつぶやく

「ちよつと、落ち着いて！」

「コロスコロスコロス…」

彼の眼は赤くなり、まるで過去に何十人も殺害したような目つきに変わっていたのである。

（ああ、やつぱり…。彼の過去に何かあつたのね。一か八かだけ賭けてみるみるしかなさそうね）

そう思つた紫は彼に近づき、そして抱きしめたのである
「貴方、落ち着いて。私は貴方を絶対裏切つたりしないわ」

「o m b殺w q」

そういう彼女だが、彼は紫の首元に咬みつこうとしていた。完全に殺す気満々である

「落ち着いて、私よ？」

そう言うと紫は彼の頭をやさしく撫でた

カラーン…

静まり返つた部屋に乾いた金属音が鳴る

「ゆ、かり…？」

「そうよ、私よ。八雲紫よ」

「なん、で…？」

「ふふ、今日から貴方の面倒を見てあげるわ」

紫は優しく、そして妖艶な声で彼を諭した

「俺の、面倒を見る…？」

「そうよ。きっと今までつらいことがあつたのは私にはわかるわ。だから私を信じてちようだい。もし貴方を裏切つたりしたらさつきの刀で私を斬つていいわ」

「…わかった。もし裏切つてみろ、その時は容赦なく叩き斬るからな」

「ええ、約束するわ。ついでに貴方にはこの能力をあげるわ。幻想郷で能力は最低限必要なのよ」

「どんな能力や？」

「ありとあらゆる物を反射する程度の能力よ」

※元ネタはとあるシリーズの一方通行の能力と一緒です。制限時間無し・へたし本家を上回る能力です

「紫？ 何か顔が近いんやけど…」

なんと紫は彼と唇を重ねたのだ

・・・うらやまけしからん

「ん…」

「紫…」

「ふふ、貴方…？」

その日、俺は紫と一線を越えたのである

(18 禁要素書いたらまたタグ追加せなあかんから割愛します。申し訳ございません。
by 作者)

次の日

「ねえ貴方」

「ん? なんや?」

「一度で良いから騙されたと思って幻想郷に来てみなさいな」

「ああ、わかつた。つてちょっと待て。俺さ、地元で祭やつてんねんよ。せやから祭の時期には戻りたいんや」

「ふふ、わかつたわ。貴方の吸っているタバコも定期的に渡すわ」

「それなら助かる」

「本当は一度幻想郷に行つたら戻れないのだけれど、貴方は特別よ」

「そう考えると二度と祭も行かれへん、タバコも吸えないってなつたら地獄や…」

「貴方の能力は欠点があつて、ニコチンを取らないと能力が暴走するのよ」

「オイオイ…。重大にもほどがある欠点やんけ」

「だから定期的にタバコを持つてくるわ」

「ちなみに聞くけどもしも能力が暴走したらどうなるんや?」

「貴方一人で幻想郷が滅ぶわ。私が本気で戦つても勝てないかもしねないわ」

「恐ろしい能力やなオイ」

「あともう一つ。過去のトラウマ・生命の危機に瀕した時・貴方の感情が昂った時も能力が暴走するわ」

「なんでそんな能力を俺に…」

「貴方にピツタリかなつて」テヘ

「幻想郷の管理人がそんなノリでええんかよ…」

「ちなみに幻想郷に行けば貴方が意識しない限り常時反射状態よ」

（シカトかよ）

「じゃあ、幻想郷行つて紫のそば歩こう思つても俺が意識しない限り紫がどつかに吹つ飛ばされるつて事か？」

「そうよ。だからその時は意識してちようだいね」

「ああ、わかつた」

「じゃあ、幻想郷へ行くわよ」

「ああ、頼む」

「ふふふ、ようこそ幻想郷へ。幻想郷は貴方を歓迎するわ」

そして彼は幻想郷の世界へ行つたのである

（祭になると戻るけどw）

第二章・ようこそ、幻想郷へ

とある関西人の幻想入りPart3（幻想郷での異変①）

「さあ、着いたわよ」

「ここは八雲邸。幻想郷のどこかにある屋敷なのである
「あ、貴方にもう一つの能力を渡すの忘れてたわ」

「なんでやねん…」

「ありとあらゆる能力をコピーする程度の能力よ」

「オイ、俺能力2つあることになるぞ。ええんか？」

「もちろんよ。貴方は特別だもの」

※某ピンクボールのコピーという能力を思い浮かべたらわかります。

が、能力はケタ

違いです（by 作者）

「んで、紫の能力をコピーしたらええんか？」

「そうよ。よくわかつたわね」

「俺の勘や」

「あら、靈夢みたいね」

「誰なん、その靈夢って人は」

「博麗神社にいる巫女よ」

「神社ね」

「幻想郷には神社が2か所あるの。一つはさつき言つた通り博麗神社。もう一つは二人の神と巫女の3人がいる守矢神社よ」

「そうかい、ま、暇なとき行つてみるわ」

「そうね。一度幻想郷を散策してみたらどうかしら?」

「せやな、それの方が地形も頭に入るさかい、散策してきますわ」

「行つてらっしゃい。夕飯までには帰つてきてね」

「ああ、ほな行つてくるわ」

青年（スキマで） 移動中：

博麗神社

「ここが博麗神社か。おもつくそ博麗神社つて書いとるからすぐわかつたわ」

（クソ長い階段やなオイ。とりま1個目の能力使つてみるか）

キイーン…

「○□?※×\$≠!」

何言つてるかさっぱりわからないまま、神社にダイナミック参拝したのである
当然中から出てきたのは激怒した靈夢である

「ちよつと、何事よ!? って神社が崩壊してる…。アンタ、よくも私の神社を破壊したわね……」

「待つて、俺の能力にまだ慣れてなかつたんや！ 神社は直す！ せやから…、つて何か嫌な予感」

「靈符『夢想封印』！」

「えー…、いや、待てよ？ 反射に賭けてみるか」
パキーン！

何と、靈夢のスペルカードを反射したのだつた

「な…！ 私のスペルカードが弾かれた…？ アンタ、どういう能力持つてるのよ」

「俺の能力か？ ありとあらゆる物を反射する程度の能力・ありとあらゆる能力をコピーする程度の能力や」

「何そのチートじみた能力」

「せやから言うたやん。神社は直すつて」

「直せるものなら直してみなさいよ！ もし治せなかつたらタダじやおかないから！」

「先言うとくわ。俺に攻撃は通じへんで」

そう言いながらガレキと化した神社に触れる。すると元の姿に戻つたのである
「な…。いつたいどうやって…？」

「詳しいことは俺も知らん。とりあえず直す気で行つたからちやうか。ついでやしわびとして賽銭放り込んだくわ。500円だけ」

チャリーン

500円玉の入る音が鳴つた瞬間靈夢は

「アンタ、賽銭を入れたのね！上がつてお茶でも飲んで行つてちようだい！」
（なんつー巫女や…）

青年&少女一服中：

「ねえ、アンタは外来人でしょ？」

「せやで。紫と一緒に来たんや」

「へえ、珍しいわね」

「俺はしばらく紫のところで世話になる感じやな」

「そうなの？」

「ああ、せやで。せや、自分が靈夢か？」

「そうよ。気軽に靈夢って呼んでいいわよ」

「ああ、わかつた」

「そういえばもう昼ね」

「せやな、つて何やあれ」

突然赤い空に変わり、不気味な空模様となつたのである

「靈夢」

「ええ、明らかな異変ね」

「やることは決まつてるよな？」

「もちろんよ！」

「俺の能力見たやろ？俺も行くわ」

「アンタの能力ね…。わかつたわ」

そっへ

「おーい、靈夢～！大変な事が起きて…、ん？誰だお前」

「初対面の人間に向かってオマエとはひどい話やな」

「私は霧雨魔理沙だ。気軽に魔理沙って呼んでもいいぜ。お前は？」

「○○○○（投稿主の本名の為自主規制。by作者）やで」

「そうか、よろしくな！」

「ああ、魔理沙もあのわけのわからん赤いモンの正体を見に行くんけ？」

「うだぜ。しかしあの方向…、ちょっと嫌な予感がするぜ」

「あのよーわからん真つ赤な館か？」

「だとしたら紅魔館に住んでる吸血鬼が今回の異変の主犯ね！後魔理沙、彼に一度マス

タースパーク撃つてみなさいよ。面白い結果になるわよ？」

「そんな事したら消し炭になるぞ？」

「いや、一回撃つてみろ。俺の能力がわかるから」

「もし消し炭になつても文句言うなよ？ 恋符『マスタースパーク』!!!」

パキーン！

魔理沙の放つたマスタースパークはあらぬ方向へ反射されたのである

「私のマスタースパークが弾かれた…？ いつたいどうなつてるんだ？」

「俺の能力はありとあらゆる物を反射する程度の能力・ありとあらゆる能力をコピーする程度の能力や」

「バケモンだ…」

「ほな、俺の能力も二人はわかつた事やし、その紅魔館つて所に力チコミに行くぞ！」

「そうね！」

「ああ！ 私の弾幕で吹き飛ばしてやるぜ！」

（何か一瞬俺の能力とか見られた気がするけど反射しどこ）

「せや、紫に伝えとかなあかんわ。夕飯は遅くなるつて。紫！ 聞こえるか？」

「バツチリよ！ だいたいの状況は理解したわ。無いとは思うけど無事で帰つてきてちょうだい」

「ああ、わかってるよ紫。帰ったら飯にしようぜ！」
「待ってるわ、貴方」

「何故私の能力が効かない…！」一瞬でも入れたのに跳ね返されるなんて…」
「相手は3人…。だけど一人に至っては非常にまずい能力を持つてるわね…」
「お嬢様…。お嬢様の目的を邪魔する輩は私が食い止めます！」
「ねえ…、誰か一緒に遊んでよ…。いっぱい壊シテアゲルカラ…！」

第三章・紅い空（前編）

とある関西人の幻想入りPart4（幻想郷での異変②）

どこかの森

「そろつてカチコミ行く言うたわええけどさ、もうそんなに時間経つたんか？」

紅魔館への道中の森を歩いていると薄暗くなってきたのかと感じた彼は聞いた

「違うわ、ここは宵闇の森と言われるのよ」

「その割には真っ暗ちやうけどな。宵闇の妖怪がおるからか？」

「アンタ、何で知ってるの？」

「神社への行きしなに行き倒れてたし腹減つたうるさいからスイカをあげたら喜んで
食つてたわ」

「アンタよく平氣でいるわね。普通なら食べられてるはずよ」

「俺がそんなへマすると思うか？」

「そういえばそうね」

「せやろ？つか魔理沙は？」

「さつき忘れ物したつて一旦帰つたわ」

「俺そん時おらんかつたし」

「何してたのよ」

「漏れそだつたから男の特権使つてきた」

「アンタねえ…」

「しゃーないやん、生理現象なんやしさ…」

「いわゆる物陰で立ちシヨンをしていたのであつた。最低…」

「ところでアンタ」

「何？」

「この異変、アンタ一人で解決してきなさいよ。私と魔理沙は帰るから」

「博麗の巫女やろオマエ…。紫に何か言われても知らんぞ」

「そうよ。博麗の巫女が一人の人間を放つておく気？」

「その声は紫か？」

突然何もない所から声がしたと思つた瞬間、声の主が姿を現し、靈夢をスキマへ連れ込んだのだ

「そら見たことか。俺は知らん」

そう言うと彼は木にもたれかかれ、持つてたタバコに火を付けて一服したのだつた。

その姿はどこか不安げで寂しそうに見えたり見えなかつたりだそな

「あーあ、ほんの冗談なのにあそこまで言うかしら…」

「その様子やと紫にこつぴどく言われたんやな」

「そうよ、なにもあんなに言う必要ないじやないの」

「それはオマエが博麗の巫女であり、原作の主人公だからやろな」

「サラッとメタいことを：」

本当に彼一人で異変解決してしまえば原作崩壊では済まなくなる。もつと別の話になつてるだろう

「ただいま戻つたぜ！」

「お、おかえり」

魔理沙が戻つてきた瞬間

「闇符『ディイマークイション』!!!」

突然何者かにスペルカードを放たれる彼であつたが、彼は平然としている

「ところで靈夢

パキーン！

「どうしたの？」

「この森を抜けたら霧の湖つてどこに出るはずやんな？」

「そうよ。それにアンタ、スペルカードを放たれてるのによく平然としてるわね」

「ほんとだぜ：」

「能力のおかげや」

「うう、やっぱり私の攻撃が効かない…」

「言うたはずやで、ルーミア。俺に攻撃なんざ効かへんって」

「おなかすいたー」

「なんでやねん？、それやつたら直接俺に声かけろよ…。つかさつきやつた大玉スイカは？しかも5玉もやつたのに」

「全部食べた」

「「マジかよ」」

人喰い妖怪ルーミア

闇を操る程度の能力

彼曰く「食べ物さえ与えりやどうつてこうはない」

「はあ…。ルーミア、ちょっと待つとけ。後オマエら、コイツはもう無害やから」

「わかつたわ」

「おなかすいたー」

「つたく、冗談やろ…。大玉スイカ5玉も平らげてさらに腹減ったとか」

「そうボヤくと彼はスキマを使い、紫の元へ帰ったのだ

「紫、飯」

「あら、私を食べるだなんて大胆ね」

「なんでやねん」

「ふふ、食べ物でしょ？ ちょっと待つてて」

「ついでにタバコ2箱も」

「あら、どうして？」

「今回の異変でな、どうも俺の能力が暴走しそうな気がすんねんよ」

「あら、そういう事ね。わかつたわ」

少女準備中：

「はい、お待たせ。人喰い妖怪の分もあるわよ」

「サンキュー、ほな行つてくるわ」

「行つてらっしゃい」

「そう言うと再びスキマを使い戻るのであつた

「待たせたな！」

「お兄さん、おなかすいたー。あなたをたべていい？」

「ええ訳ないやろ。とりあえず全員分あるから」

「なんか某蛇のセリフが聞こえたけどスルーするぜ…」

スネーク「解せぬ」

そして彼はルーミアに食べられそうになりながらも食料を用意する彼

「どんでもない量ね…。軽く宴会が出来るわよ？」

「だとしたら酒が無いぜ…」

「ええかルーミア。一人で全部平らげたらどうなるかわかるよな…？」

「う、うん。血液逆流は嫌なのだ…」

「アンタ、いつたいどうやつたらコイツがおびえるのよ」

「ちょっとその辺のネズミ捕まえて目の前でパン！ってやつた後オマエもこうなりたい
か？って聞いた」

「お前、残酷なところもあるんだな…」

「ま、安心せえ。この異変が終わつたら迷惑料として金と食料をあの館からごつそり奪
い取つて来るからよ。そのまま餓死にまで追い込んでやる」

「アンタは鬼か！」

「そうだぜ！私でも死ぬまで借りてるだけなのに」

「オマエの場合は泥棒やんけ」

「借りてるだけだ！期間が死ぬまでなだけだ！」

「オマエな、魔導書借りに行くだけで壁ぶつ壊して大量に持つて帰つてさ、やつてる事が
泥棒どころか強盗やんけ！」

「だから私は泥棒でも強盗じやないって言つてんだろ！ちゃんと許可はもらつてるんだ
！それに食料はともかくお金まで奪い取るとかお前の方がやつてる事強盗じやないか
！」

「やかましいわ！迷惑料と思つたら安いやろが!!オマエのやつてる事はれつきとした強
盗じやこのボケ!!!」

「ちよつと！アンタらしい加減にしなさいよ！」

「ケンカはよくないのだー」

「おどれ（靈夢）は黙つとけや（いて）!!!」

「へえ…、もう一度言つて『らんなさい？』

「ゞ、ゞめんなさい…」

（魔理沙が謝るなんて珍しいのだー）

靈夢の笑顔（？）で魔理沙を黙らせたのだが…：

「なんやねん、やるんかコラ」

ドスの効いた声で靈夢に詰め寄る彼

彼は一度ヒートアップすれば止まらないのであつたが…：

「アンタ、後ろに紫がいるわよ？」

そう言われ振り返る彼

「紫か、どないしたんや？つておらんやないけ！」

「しようもない言い合いしてないでさっさと行くわよ！」

「はいはい」

（目が一瞬赤かつたわ…。あんな殺気向けられて詰め寄られたら私殺されるところだつた
わよ）

（わ、私もだ…。殺されるかと思つたんだぜ…）

（お兄さんの目つき、かなり人を殺してきた目だつた気がしたのだー…）

3人は二度と彼を怒らせないようにしようと心に決めたのだった

第三章・紅い空（おとなしい人ほど怖いものは無い）

とある関西人の幻想入りPart5（幻想郷での異変③）

ルーミアの食欲に唖然とした彼。そして宵闇の森を抜け霧の湖へ到着した彼らだが
⋮

「ここが霧の湖か。オマエらなら飛んで行けるから楽やろな…」

「アンタも一応飛べるでしょ？」

「そうだぜ。だいたい能力使えばすぐじやないか」

「あのな⋮」

少しでも楽をしようとする彼女らだが、以前に能力を使つて神社をガレキの山へと変えた彼は能力で飛ぶのを拒んでいた

「靈夢、オマエ俺が能力使つて俺が何したかわかるやろ？そーゆー事や」「そういえばそうね。まあ神社も元に戻ったんだからいいのよ」

「ほな次は紅魔館をガレキの山に変えようか？」

「お前⋮、やる事がアグレッシブだな」

「迷惑料と考えたら安いモンや」

「絶対高くつくでしょが！そもそも私らは異変を解決しに行くのよ？だいたいアンタ

は…」

(あーあ、長くなりそうやから音を反射しとこ)
まるで能力の無駄遣いそのものである

「…するとアンタが異変の首謀者になるのよ? ってアンタ聞いてんの?」
「聞いてる聞いてる」

「聞いてないじやない!」

「なあ、靈夢」

「なによ!」

「そ、そんな私に当たるような返事しないでくれよ…」

「オイ、あそこに誰かおるで?」

「何?」

彼の指さす方向に人影らしきものがある

「オイ、そこにおるのはわかってるんや。出てこい」

彼の指をさす方向を向いてみると、水色の妖精が仁王立ちしていた

しかもその妖精が立つてている付近は少しひんやりしている

「そこのヘンテコな服を着た人間! あたいと勝負しろ!」

外の世界でテーラードジャケットと呼ばれる服をヘンテコ呼ばわりされた挙句、お氣

に入りの服を貶された彼は、即座に戦闘態勢に入る

「ほお…、ずいぶん言うてくれるやんけ…！」

（あ、まずい…）

「なんぼでも勝負に付き合つてやるよ、その代わり何百、何千と死んでも構わねエなら
な」

「あたいは最強だぞ？人間なんてコテンパンにしてやる！」

（このアホはまともにケンカ売る相手すら見られへんのけ？）

（妖精だからしようがないのよ。それにアンタ、やりすぎないでよ？）

「つーか、名前も名乗らんとよーケンカ売りに来たな」

「あたいはチルノだ！まあ教えたところであたいが氷漬けにするから関係ないけどね」
（氷の能力でも使ってきそうやな…。今のうちに火をおこすか）

「ま、アホに用は無いから。はよ溶けへんうちにおとなしく帰れ」

彼の言葉が気に入らなかつたのか、チルノは彼に吠える

「あたいはアホじゃない！最強だ！」

「…どないせえと？」

あきらかにいらだつている彼は靈夢に問う

「…やりすぎないでちようだい」

「へーへー」

彼は目つき、目の色を変え最後の警告を伝える

「オイ、チルノだつけか？最終警告や、そこをどけ。さもないとこの世から消す…！」
ドスの利いた声で最終警告を伝え、目の前でカエルを破裂させたのだった
「オマエモコウナリタイカ？」

「ひつ…！」

（（あれは…！））

「わ、わかったよ…。け、けど次はあたいと勝負しろよ、人間！」

「はなからのいてくれりやええのに…」

「アンタ、一体どうやつてカエルをあんな風にしたのよ？」

「血液の向きを逆にさせただけやで」

「恐ろしいんだぜ…」

「オマエらも一回やつてみるか？」

「アンタは悪魔か！」

「wwwwww」

「本当に紅魔館をさつきのカエルみたいにさせそうだぜ…」

こうして、戦闘を回避させた一行なのだが、彼にはもう一つ秘密があるのだった

第三章・紅い空（不戦勝）

とある関西人の幻想入りPart6（幻想郷での異変④）

紅魔館・正門前

「着いたぞ。遠かつたわ、ほんま…」

到着するなり愚痴る彼

「ご苦労さん、ここからどうするの？」

「オマエら飛べるなら飛べや！俺の能力を酷使しやがつて…！」

「まあまあ、この異変が終わつたらゆつくりできるんだから」

「そうよ。だいたいアンタはカリカリしそぎよ？」

（話聞くのもめんどくさいや…）

「どりあえず一服してくるわ」

「はいはい、それとアンタ」

「何？」

「この先どうするの？分かれて行動する？」

「ん…」

（3手に分かれたほうが効率ええんかな…。ま、実際俺一人で行動できるし）

「どうするんだ？」

「3手に分かれる。靈夢、オマエは主犯格を探してくれ。魔理沙、オマエは好きなもん貰つてこい。俺は目の前で寝くさつてる門番倒してから正面突破するわ。ほんでこれを渡すわ」

二人に渡したものは、外の世界で言うインカム（トランシーバー）というものを渡したものであつた。ちなみに紫にも渡している（第4話の後半を参照）

「なにこれ？」

「俺が前おつた所で遠くの相手と話せたり状況を知らせる機械や」

「へえ、この異変が終わつたら持つて帰つてもいいか？」

「オマエの収集癖には心底あきれるわ……」

「つーわけで、作戦開始！俺はタバコ吸つてから行くわ」

「アンタねえ……」

「能力暴走してもええな」「さつさとしなさいよ！」

「そうだぜ！早く異変解決して魔導書をパク：借りて読みたいしな」

「オマエ……」

（多分なんべんゆーても無駄やな）

あきれる彼である

「せや、そこで寝くさつてる門番を倒してから作戦実行するか？」

「それもそうね」

「えー…」

「文句があるなら一人で行け」

「わかつたぜ…」

「あなた達は何をしに来たのですか？ここから先是通しませんよ？」

突然、さつきまで寝ていた門番が起きて戦闘態勢に入ったのだ

「さつきまで寝くさつてたのにいつの間に起きたんや…？」

「そうよ。そんな事よりそこを通してちようだい！」

「そうだぜ！異変を解決しに来たのだからな」

「異変…、この紅い空の事ですか？それならお嬢様がこの空に変えました」

「ならなおさら帰るわけにやならんわな…」

「お嬢様から何人もここを通すなど命令されているので通すわけにはいきません！」

突如弾幕が降り注ぐが…

「なんやこれ？掴んだんやけど大丈夫なんか？」

「「え…？」」

「アンタ、いつたい何者なのよ…？」

「私にも教えてくれよ、いいだろ？」

「なんと弾幕を反射しつつ掴むというとても人間とは思えない事を成し遂げたのだ
「わ、私の弾幕をはね返すどころかわしづかみするとは…。しかし、これならどうですか
？虹符『彩虹の風鈴』!!」

形で表すなら渦巻状の弾幕を繰り広げてきたが、一切の攻撃が通用しない彼
「私が近距離で戦うわ！アンタはその間に体勢を整えてちようだい。それと「わかつて
る、魔理沙の援護だろ？」

（なんでわかつたのかしら…？）「そうよ！」

「魔理沙、例の技出せるか？」

「もちろんだぜ！」

マスタースパークを出す準備にかかる魔理沙。そして弾幕が当たらないように魔理
沙の肩に触れて反射を一時共有する彼

「そないちんたらしてたら頭が痛くなつてくるから早くしてくれ…」（どうしよう、タバ
コが吸いたいし腹痛い…）

「よし！靈夢、伏せろ！恋符『マスタースパーク』!!!」

彼女のマスタースパークが直撃した美鈴。本来なら消し炭になつてているのだが…。
「中々やりますね…。魔法使いは近接戦闘が不得意と聞いたことがあります。そこの

貴方、私と近接戦闘で戦つてみませんか？」

「俺か？」

「そうです。貴方からは何か特殊な気が放たれているので少し……ね？」

「はあ……。俺はやらん。めんどくさい」

「ええ？」

靈夢、魔理沙が声をそろえる

「なつ……!?では私から行きます！後悔しないでくださいね……？」

「オイ！俺の能力を聞くバキイ！「ギヤアアアアア！」

「あーあ、確実腕がイカれたな……」

先手必勝と思つた美鈴は彼に右ストレートを出すも反射され、右腕は粉碎してしまつたのだ

「あらら……。門番も寝起きで頭が回つてなかつたのね……」

「腕がおかしな方向に向いてると思つたら骨が粉砕してるんだな……」

さすがにこのままではかわいそうと思つた彼が美鈴の元に寄り

「オイ、俺の能力を名乗るのも名前も名乗つてなかつたのは謝る。俺の名前はコウタ。能力はあらゆる物体を操作する程度の能力・複製（クリエイトコピー）する程度の能力や。その腕を治すから楽な体制になつてくれ」

能力、そして自分の名を（メタな話ここからあの名前で行きます）名乗り、腕の治癒を試みるコウタ

「うう・・・、敵ながら・・・。ありがとうございます」

「今度はサシで決闘でもするか？」

「ですね」

（あのバカ・・・）

二人の視線が冷たく、そして嫉妬の目つきに変わっているのをスルーするコウタ
しかし・・・

「へ、へつくしょい!!!」

（ええ・・・）

「ヤベ、間違えた・・・」

次の瞬間

パアアン!!!

「はいやらかしたく・・・。どないしょ・・・」

なんと、くしゃみをして治癒どころか肉塊に変えてしまったのだ
美鈴だつたもの」

「アンタ・・・、うつ・・・」

「おえええ・・・」

ある意味阿鼻叫喚になつてしまつたのである

「人間ならここで終わりやけど多分コイツ妖怪やろ。とりあえず元の体にすればそのうち治るやろ・・・」

（（うえええ・・・））

リバースしている二人をよそに復元していく弘太
「これでええやろ」

つぎはぎだらけの美鈴「」

「アンタねえ・・。どう見てもつぎはぎだらけじやない！うつ、吐き気が・・・」
「無理にこつち向かんでええのに」

「と、とりあえずこつからどうするんだ？」

「正面突破してその後に俺の作戦通りで動こや」

「そうね。さつさとこの異変を解決させましょ！」

正面玄関の扉を開ける彼女らだが、コウタはと

「悪い、先行つててくれ」

「どうしたのよ？」

先へ行くように促す彼

「能力が・・・」

「なるほどね、早くしなさいよ?」

「わかった」

そう言い、先を急ぐ靈夢と魔理沙

そして美鈴のそばに駆け寄る

「さつきは悪いな、能力が暴発してしまつたんや。悪気はない。もし意識を戻して復活したなら俺をブツ飛ばせ。それくらいのことやらかしたんや・・・」

返事を返さない美鈴に言い放ち、その場を立ち去ろうとするが

「いいえ、気にしないでください。げほつ、かはつ」

「!? オマエ、生き返つたのか・・・? てつきり殺つてしまつたのかと・・・。すまんな・・・」

「大丈夫ですよ、私はこう見えて妖怪なので・・・。げほつ、げほつ・・・」

「もうしやべるな。おとなしくそこで傷を癒してくれ・・・。俺はもう行くから」

「わかりました。お嬢様はとても強いです・・・。げほつ、げほつ」

「わかつたからもう話すな! ええか、次話したら分子レベルにバラバラにすんぞ・・・」

彼の殺氣を感じ取つたのか、黙る美鈴

「もし生きて帰つてきたら、この責任は取るから」

(どうしてあんなに脅してきたのに目は悲しそうな眼をするのでしょうか・・・それに責

任つて……？もしかして……？あうう……//

何か少し勘違いをしている美鈴をよそに、紅魔館の門を開けて進むコウタ
「ようこそ、紅魔館へ。今日は誰も招待など受けていませんが…？」

「オマエは…？俺の背後をつくとは中々やるな…！」

門を開け、エントランスに入つた瞬間、背後から声を掛けられる

第四章・紅魔館突入（能力の暴発にはご注意）

とある関西人の幻想入りPart7（幻想郷での異変⑤）

紅魔館・エントランス

「私は、紅魔館のメイド長を務めている十六夜咲夜というものです」

紅魔館のメイド長・十六夜咲夜

「へえ…。俺はこの世界に連れて来られたコウタつていうものや。能力はあらゆる物体を操作できる程度の能力、あらゆる能力を複製できる程度の能力者やで。メイド長さんは何の能力を持つてんだ？」

幻想郷の来訪者・コウタ

「私は時間を操る程度の能力です」

（少し戦い方を工夫せな反射が破られる…。そーなつたらメイド長さんも美鈴の二の舞に…）「なるほどな…。ある程度予想はつく能力やな」

「察しが早いですね。ではそのままお帰りください」

「そーしたいのは山々や。せやけどこの異変解決せな帰られへんねんよ」

両者がにらみ合い、一触即発の危機的状況

低級妖怪や低級妖精がいたら間違ひなく裸足で逃げるだろう…：

「なるほど…。では貴方はお嬢様の行為を阻止するという事ですね…?」
「そーゆー事」

「ふと思いましたが、貴方がここにいるという事は門番の美鈴を倒したのですね? 目の前にいる青年の実力を確かめたかったのか、そんな質問を投げかける 「美鈴の事か? ちょっとした事故で今は安静にしてるはずやで?」

「…どういう意味ですか?」

咲夜は怒りをあらわにしながら問う

「美鈴は俺と一緒に来た靈夢と魔理沙で最初は戦つてた。けどあの二人が負けたから俺が戦つたんや」

「それとどういう関係があるので?」

「そう怒んな。せつかくの可愛い顔が台無しになるからやめとけ。話を戻すけど、美鈴は俺に弾幕を放つて殴りかかってきたんや。けど俺の能力で右腕が粉碎したんよ」

「反射で美鈴の腕が粉碎? いつたい貴方、何をしたのですか…?」

さらに怒りが増す咲夜

「俺の反射は文字通り何でもはね返す。弾幕は明後日の方向にはね返せるけど肉弾戦の場合そうはいかん。はね返す方向が一点やからな」

「つまり、貴方が反射さえしなければ美鈴は右腕を粉碎しなくて済んだのですね」

「そんなことしたら能力の暴走が起ころる。さすがに腕が粉碎したままはかわいそうやら
ら能力使つて腕の治癒を試みたんや」

「じゃあなぜ安静にする必要が？ 治癒を試みたつて事はまさか失敗をしたのですね？」

「今にナイフでも飛ばしそうな程怒りをあらわにする咲夜

「ちやうぢやう、普通に使えば美鈴の腕は治つとる。せやけどな、魔が差したんか誰かの
いたずらか知らんけど俺がおもつきしくしやみをしてしもうたんよ。ほんで能力の計
算が狂つて美鈴は内側から破裂したんや」

「…貴方の言つていることがにわかには信じがたいですね。その後はどうされたので
すか？」

「普通の人間ならあの地点で終わつてる。せやけど美鈴からは妖氣を感じた。一か八か
で賭けたらつきはぎだらけやけど治つたよ」

「疑われているのをスルーし、淡々と答える

「それで、今は安静にさせているのですね？」

「ああ、そーゆー事。あの件で俺の能力は人間はおろか上級妖怪にも危害を加える能力
やなと思つてきたんよ…」

「普通の人には見えないが、咲夜本人にはなぜか悟られる
「ではなぜ、貴方はそんな顔をしているのですか？」

「普通ならあれで美鈴を終わらせる事なんざ簡単や。俺はむやみな殺生はせーへん」

「…わかりました。これが最後の警告です。早々に屋敷から出ていきなさい」

先ほどとは違ひ、冷徹な表情でコウタに警告する咲夜

「…メイド長さんは語り合えると思った俺がアホだつたわ」

「なるほど、やるというのですね。私も貴方と語り合えると思ってました。残念です」

両者戦闘態勢にかかる

「…なあ メイド長さんよ」

「なんですか？」

「俺的には美鈴の二の舞にさせたくないんよ。メイド長さんみたいなかわいい人を見る
と余計傷つけずどう戦うか考えてまうんよ」

「口説いているのか口説いていないのかはつきりしたらどうですか？まあ、仮に口説かれ
ても別に私は…」

少し口ごもる咲夜

「メイド長さんよ、俺からは一切攻撃をせん。俺の反射を突き破つたらメイド長さんの
勝ち。突き破れず、切り札でも俺を倒せなかつたら俺の勝ちでええか？」

…よくわからない提案を出すコウタ

「ただ、俺の反射を突き破るって事は相当なダメージを俺に負わすけどメイド長さんは

当然紅魔館がガレキに変わることを覚えとけよ?」

咲夜が先制攻撃でナイフをコウタ目掛けて投げるもはね返される

(なぜ私を攻撃しないと宣言する?しかも反射を突き破れば私が死んで紅魔館が崩壊する…?まるで意味が分からぬわ。それにナイフじゃ歯が立たないわね)

大量のナイフを投げるも全て天井へはね返される咲夜

「ならこれならどうかしら?奇術「ミスディレクション」!!!」

突然クナイ状の弾幕がコウタに降り注ぐ

(コイツ天然とちやうか?俺の能力を聞いてたやろ……)

(ふふつ、その弾幕は凹。本命はこつちよ?)「幻象「ルナクロック」!!!」

「メイド長さんよ…、ナメてんのけ?つて、は?」

突如米粒弾を波紋状に飛ばすが次の瞬間

咲夜以外の時間が止まつたのである

「ふふふつ、時間を止められたなら貴方は反射するのにも多少時間がかかるはず。貴方とならやつていけそうな気がするけど、ここでお別れね」

そう言い放ち、大量のナイフをコウタのゼロ距離に配置する

そして再び時が動く

「なつ…!」

いつの間にか大量のナイフが目の前に配置され、困惑するコウタ
しかし・・・

全て天井にはね返したのだつた

「なっ!? 私の攻撃が甘かつたようね・。けどこれで本当に終わりよ。幻世「ザ・ワール
ド」!!!」

「どう攻撃しても無d」

再び時が止まる

「さつきのは軽く止めただけ。今回は完全に時を止めたわ。貴方の反射もこれで終わり
よ? 何せ、貴方の時間は私だけの物になるんですから・。フフフツ」

咲夜はトドメを刺そうとコウタの首筋に大量のナイフを配置する

しかし・・・

ほう、メイド長さんよ、とんでもないジャイアニズムな事しとるやんけ・・・!

背後からドスの効いた声が聞こえろ

(時を止めたはずなのになぜ?)

「こりや完全に時間が止まつてんなん。オイオイこりや一生見られへん体験やぞ?」
私だけの世界なのになぜこの男がいる・・・!

「時間を止めても意味ないのにな～」
ぐつ、おのれ・・・・！

「貴様…!! どうやつて私の能力を…！」

能力を破られ、怒り狂う咲夜

「まあまあそう怒んな。せつかくの顔が台無しになんぞ？」

「黙れ！なぜ私の世界に入ってきた！どうして私の世界に入つてこれたんだ！」

完全で瀟洒な従者と言われた十六夜咲夜が、彼女の切り札とも言われるスペルカードを使つたのにもかかわらず目の前の青年にあつけなく破られ、取り乱したかのように吠える

「はあ…、簡単に言うとメイド長さんの能力が発動した瞬間に少し空気の流れが変わるんよ。一回目はまんまとやられたけど、二回目となりやそはならんよ。二回目の地点でおおよその計算は出来るからな。それに、俺にもう一つの能力があるのを忘れたんか？」

「なつ、まさか…・?」

「そう、メイド長さんの能力を複製したんよ。そのかわり制限時間付きやけどな。それでも俺はやろうと思えば今すぐこの場でメイド長さんをバラす事も可能や。俺としてはメイド長さんを殺したくないから極力やりたくないけど…・。どないすんや？まだ

「やるんけ？」

「・・・私の負けですわ」

「そうか。ほな時を戻してくれ。その後少し話をしようか」

こうして咲夜は、どの能力を使つても目の前の男には勝てないと悟り、降伏したの
だつた

そして

「靈夢、俺や。聞こえるか？」

「今時オレオレ詐欺なんか引つかからないわよ！」

「後で合流した時ジャケット脱いでええか？」

「冗談よ。どうしたの？」

「主犯格のメイド長と接触。主犯格の部屋へ連れてつてもらうからエントランスに来て
くれ。それと白黒の強盗も」

「誰が白黒の強盗だ！借りに来ただけだ！いいかげんにしろよ!!」

「・・・メイド長さんよ」

「咲夜でいいわ。どうしたの？」

いつの間にか少し距離が縮まつた二人である。その間のお話はまた番外編として
「後で魔理沙のボケが壊した壁直しどくわ。ほんで代わりに俺が謝りに行くわ」

「あら、意外と律儀なのね。昔の貴方はそうでもなかつたつて自分から言つてたのに？」

「・・・ほつとけ。とりあえずあの二人がここに来たらそのお嬢様の元へ案内頼むで？」

「わかつたわ」

「ありがとうな、咲夜。俺は極力殺さない方針で戦う。ただ吸血鬼なら簡単にくたばらんやろ？」

「ええ、お嬢様は私とはケタ違ひの強さよ？たとえ貴方でも無事でいられたら奇跡よ」

「そーかい。ほな、俺が本気で戦つてそのお嬢様に瀕死の重傷を負わしても咲夜は絶対加勢すんなよ？俺は咲夜を殺したくもないしましてやその時は俺の能力が暴走してるからな。知らんけど」

「知らんけどつて貴方ねえ・・・」

きつと彼なりの警告だろう

何せこの後の戦闘で本当に暴走するとは誰も想像をしていないだろう

「ついたわよつてアンタ！なんで敵であるメイドと仲良くしてんのよ！ほら、そこのメイド！さつさとそいつから離れなさい！」

「オイ待て靈夢。コイツはもう敵意は無いんや。もし変な事すればあの門番のようにするからつて言つてあるから大丈夫や！」

「あの門番・・・うぶつ・・・」

(よほどひどいものを見たのね…)

「そーゆーことや」

「あれ？ 魔理沙は？」

「あのクソカス白黒強盗…！ オイ！！ええかげんはよこいや!! いつまでかかつとんねんこのくされ白黒魔法使い！ おどれのほうきはバツタ物かコラ!!」

(恐ろしい目つきになつてゐるわね…。やつぱりまだ昔の口調なのね)

(またブチギレてるわね…)

魔理沙が來てないのをコウタはついに堪忍袋の緒が切れる

「いや～すまんすまん、借りた本を途中で落としたり無線機の調子が悪くなつて「遅いん

じやおどれコラア！！」

「ギヤアアアアアア！！」

ズドオオオン！

なんと魔理沙を音速で壁にぶん投げたのだ。普通ならそのまま壁のシミになつたであろう…・・・

(・・・)

咲夜までもがこの人は絶対怒らせちゃダメだと思つた瞬間である
「うう、生きた心地がしないぜ…」

「オマエが悪い」

「アンタねえ…。いくらなんでも壁にたきつけるのはどうかと思うわよ?」

「アナタ…」

「咲夜、全員揃つたから案内頼む。つとその前に手洗い貸してくれ」

「わかつたわ」

少女＆青年移動中

「ここよ。洋式だか r 「座つてやれつてんだろ? わかつとるよ。俺が前の世界におつた時もそうやつたし」

「なら話が早いわね」

「待つてくれよ?」

「はいはい」

青年WC参加中

「終わつたぞ。咲夜は? つて当然遠慮するわな。野郎の入つた後なんざ入らんやろうし」

「まずアナタにはデリカシーというものが無いのかしら?」

「知らん、とつくる昔にどつか行つたわ」

「そう…」

少女＆青年再び移動中

「戻つたぞ！」

「ずいぶん遅かつたじやないの」

「すまん、ババしてた」

「アンタねえ！」

やつぱりデリカシーが無いこの男である

「どうかお前、なんで平気で一服してるんだ!?」

「アナタ、ここは禁煙ですよ？」

「能力が暴走してもいいなら」

「なるほど理解」

「アンタ達ねえ…。なんで息ぴったりなのよ。というかアンタも早くしなさいよ！」

「へーへー」

「しかし不思議ですね」

「ん? 何が?」

「普通なら煙の臭いがするのに全くしませんから」

「ん? 能力で臭いを消してるけど?」

「「マジかよ!」」

能力つてすごいですねー

「ふう、ほな行くか。靈夢、魔理沙。準備はええな?」

「もちろんよ!」

「同じくだぜ!」

「咲夜! オマエは俺らを案内したらその場から離れる。ええな? 巻き添え喰らつてもさすがにフオロー出来へんから」

「わかつたわ。再々言うけどお嬢様は私よりはるかに強いから」

(絶対生きて戻ってきてくださいね)

(ああ、わかつてる)

(約束ですよ? アナタ・・・//)

こうして三人は咲夜の案内で異変の主犯格の部屋へ案内されるのである

そして咲夜はと/or>うと、コウタに好意をよせていたのであつたが本人は知る由もなかつたのであつた・・・

??? 「ようこそ、人間達よ。わが紅魔館へようこそ。歓迎するわ」

「へえ、このクソ広い部屋に一人で・・・。見た目以外は威厳があるな、主犯格さんよオ

・・・」

「博麗の巫女としてアンタを退治するわ！」

「先に言っておく。私の弾幕は一味違うぜ！」

第四章・紅魔館突入（カリスマを持つ者は口調が一味違う）

とある関西人の幻想入り（キヤラ紹介①）

今作の主人公（オリキヤラ）コウタ

あらゆる物体を操る程度の能力

複製する程度の能力

幻想入り前はある地方に一人で住んでいたが、そこで住んでた時は中々ひどい目にあつたとの事

ある人物（後述）と出会い、幻想郷へと赴く

普段は何もしないが怒ると口調がヤクザ口調になつたりとかなり気が短い（ように見えるが：）

話し方は関西弁丸出しだが標準語も時折話す

戦闘面では能力のおかげで相手に危害しか加えない為あらかじめ警告を行うがそれを無視すると相手は何もできず一方的にやられるしかない（後に能力を破る人が現れるがそれはまた別の機会に）

こちらから攻撃を加えないが、味方が攻撃されたりすると能力を駆使して戦うが命は奪わない（ただし相手は確実瀕死になる）

能力暴走時

普段着として来ているジャケットやコートが破れ、右腕のみ変異し大きなツメが生える。目つきは人を何十人も殺害したような目つきになり、紅くなる。なにより厄介なのが手当たり次第攻撃をする為、幻想郷で一番危険とされる。ただし、ある事がきっかけで自分で暴走時でも制御出来たり自分から暴走時の姿になれる。

能力暴走の条件

度重なるダメージを負い、危機的状況になつた時。生命の危機に瀕した時。反射を破られた時。トラウマがよみがえった時。どの状況でも一番危険な状態となり、こうなれば誰も止めるものはいないが：

普段の姿

ジャケット姿、黒もしくは紺色のズボン、黒の靴（コート姿になるとオールブラックで統一）

視力があまりよろしくない為メガネを付けている
ヘビースモーカーもある（能力暴走を抑える為）

周りの事を考えて能力で匂いを消している

性格

不器用でデリカシーの欠片も無いが、困つてゐる人や悩んでる人を助ける主義（本人曰

く、本人の二の舞になつて欲しくないとの事)

原作主人公、登場人物

八雲紫

境界を操る程度の能力

幻想郷にコウタを連れてきた張本人

幻想郷の管理者でもあり、幻想郷を誰よりも深く愛し、魯威になる者は排除する

ある日、コウタの家に乱入（？）して幻想郷へ誘おうとするが、豹変した彼に殺害されかけるも抱擁しながら「私が貴方の面倒を見て育ててあげる」と言い、そのまま一夜を明かした（らしい）

彼を呼べば紫の元へ一目散に駆け寄り、彼が危機的状況となればいの一番に駆け付けるという関係がある

彼の暴走時は誰もが止められず、彼女が駆け付けるも殺害されそうになるが抱擁する事によつて事なきを得る（ただし、紫以外の人物が抱擁すればもなく殺害されるらしいが…）

博麗靈夢

空を飛べる程度の能力

単純で裏表が無い。喜怒哀楽が激しく、人間・妖怪を問わず惹き付ける不思議な雰囲

気の持ち主。

仕事が妖怪退治であるため妖怪に対しては厳しい態度を取るが、人間にも妖怪にもさほど興味はない。後述の霧雨魔理沙と二人で行動する場面がある。コウタが博麗神社をガレキの山へ変えたときは上級妖怪でもはだしで逃げだすほど怒っていたが、彼の能力を見るや否や彼に興味を持ち始める

お賽銭箱が年がら年中すっからかんらしい。その為定期的に彼にお賽銭を入れてもらつたときはどんなに不機嫌でも上機嫌になる（彼曰くどういう生活してるのか心配との事）

霧雨魔理沙

魔法を使う程度の能力

魔法の森にある霧雨魔法店で一人暮らしをしている魔法使いの少女。

力に執着し、力を誇示する自信家だが、その力は誰にも見せない「努力」を積み重ねて得たものである。

紅魔館へ遊びに行つては毎回魔導書をどつきり持つて帰り、しまいには「死ぬまで借りていくぜ！」というんじゃない事をする。（後日彼が魔導書の持ち主に頭を下げに行つたときはなぜかとばつちりを食らい、そのまま戦闘になつたとの事。そして和解し、そのまま話し相手や愚痴り合いする関係になる）

紅美鈴

氣を使う程度の能力

「氣を使う」と言つても、「氣配り」とかそういう意味の“氣”ではない。オーラとかそういういた類の、武術における“氣”的ことを指す。

普段は紅魔館の門番をしているが、しそつちゆう居眠りをして後述の人物に怒られたりナイフを飛ばされることもしばしば。

門番として侵入者を撃退するために戦うが、それとは別に武術の達人である事により、武術家としての挑戦者もかなりの数に上るらしい。

目撃報告例によると昼寝をしていたり、動きの変な緩い踊り（太極拳）を踊っていたりといった妖怪の割には穏やかなエピソードが多く、話しかけても普通に世間話をしたり愚痴を聞かされたりするという事から危険な妖怪ではない事が窺える。館に忍び込もうとしたりすると遠慮なく攻撃してくるようだが、その場合も謝つて退散すれば見逃してくれる。

今回の異変（紅霧異変）で門番としての行動をするが、コウタの反射にやられ右腕を粉碎骨折してしまう。それを見かねた彼がかわいそうだと思い、治療するも彼の不注意で能力の計算が狂い、内側から破裂してしまうという余計かわいそうな事になるも、彼が修復して元の姿に戻る。そして彼に「こうなつたのは自分のせいだから責任は取る」

と言われるがなぜかえらい勘違いをしたのである。後日、彼と修行をしている姿が目撃され、彼はあらゆる方向から猛烈な苦情（？）が来ることになる。

十六夜咲夜

時間操る程度の能力

紅魔館の主であるレミリア・スカーレットに仕えるメイド長。
紅魔館に住んでいる唯一の人間。

今回の異変（紅霧異変）でコウタと対峙。彼も美鈴のようにさせたく無いと戦闘を避けていて、彼女も危険を察知したのか戦闘を避けていたのだが、お互い語り合えなくて残念そうに戦闘が始まる。反射を使われ、時を止めれば反射も破れると思つたのか時を止めるも攻撃は反射され、しまいには「幻世「ザ・ワールド」」を使うも時を止めたはずが彼には効いていなかつたのに対し、激怒するも彼には勝てないと察知したのか負けを認める。

彼との関係

不思議な事に恋愛関係になつていつている

彼女の心境などを聞いた彼は、彼女にアドバイスしたことがきっかけで再び戦闘になりかけるが、心の底から思つてのことそのまま素直に生きていいと言われ、彼の生き方について行くことを決意。（彼曰くこんなろくでもない人間について行つても

つまんないぞ?と言っていたが:)

異変後はより一層彼にアプローチをするが、ある人物（番外編②に登場）が毎日彼にべつたりとくつついている為中々出来ない模様。彼と一夜を明かした（らしい）

とある関西人の幻想入りPart8（幻想郷での異変⑥）

「ようこそ、人間達よ。わが紅魔館へようこそ。歓迎するわ」

扉を開け、敵意の無いような口調で話す1人の少女

そう、今回の異変の主犯、そして紅魔館の主・レミリア・スカーレットである
「へえ、このクソ広い部屋に一人で……。見た目以外は威厳があるな、主犯格さんよオ
……」

「博麗の巫女としてアンタを退治するわ！」

「先に言つておく。私の弾幕は一味違うぜ！」

こちらは敵意むき出しで話す

「ふふ、愚かな人間どもよ、この私を倒せるとでも思つて？」

「俺としては倒すじやなく殺すなんだけどな……！」

「アンタ、殺してどうするのよ！」

「そうだぜ！ 退治ならまだしも殺すなんて物騒すぎるぞ！」

…早速仲間割れするアホ3人

「だいたいアンタは……」

「そもそもお前は極端……」

(聞こえなーい)

音を遮断したのがわかつたのか突然

「無視するな！」

と一喝する靈夢と魔理沙

「……あなた達はいつたい何しに来たのかしら？」

見かねたレミリアが問う

「あー、そうだつた。オマエにこの赤い霧を戻してもらうんやつたわ。無理なら無理で力ずくで戻してもらうけどな」

「私は博麗の巫女としてアンタを退治するわ！」

「私は靈夢について行つて面白そだから私も参戦するぜ！」

「オマエは帰れ!!」

「あんまりだぜ……」

冷たくあしらう二人

「……で？ 私をどうするつて？」

ややイラつきながらも問うレミリア

「さつきゆーたはずや。聞こえへんのか？ クソガキ」

「貴様……もう一度言つてみろ」

「なんべんでもゆーたるわ、クソコウモリ」

「貴様だけは殺す……！」

「やつてみろや」

互いに臨戦状態になる二人

「まあ、私としては楽しみなんだけどね」

「靈夢、楽しみつて……？」

「ストレス発散よ」

一部の界で鬼巫女と言われるようなことを発言をする靈夢

「あら、楽しみつて何かしら？」

靈夢の発言を聞いていたレミリアが問う

「あら、てつきりアイツとやり合っていたのかと思つたわ」

「ふふ、貴方達3人まとめて相手しないと私としては面白くないわ。それに……」

3人（約一名暴走寸前だが）の頭の上に？マークが浮かびそうな発言をするレミリア

「こんなに月も紅いから 本気で殺すわよ」

そう言い放つレミリアに対し

「そーか…」

敵意をむき出しにする3人

「「（）んなに月も紅いのに（んやつたら）」」

「楽しい夜になりそうね（だぜ）」

「永い夜になりそうね（やな）」

3人が言い放ち、戦闘状態へ突入する

「先に言うの忘れてたわ。俺に能力は一切効かんからそこんとこよろしく」

「アンタ能力名言いなさいよ…」

「言つとくが私の弾幕は一味違うぜ？」

「へえ…、どんな弾幕か楽しみね。白黒の魔法使いさん」

「ア？なんでわざわざ…」

「貴方の能力はあらゆる物体を反射する程度の能力、でしよう？」

「なつ…！」

レミリアに能力が知られた彼は驚きを隠せないのであつた

「オマエ、何で俺の能力を…」

「あら、伝え忘れたかしら。私は運命を操る程度の能力よ。例えばこういう風にね…！」
直後、無数の弾幕が飛び交う

「オマエは頭悪いんとちやうか？んな弾幕…」

「アンタ！今すぐその弾幕から離れなさい！」

靈夢が叫ぶが間に合わず被弾してしまう

普段なら反射出来る弾幕がなぜか反射出来ないのであつた

「があああああ！」

無数の弾幕がコウタに降り注ぐ

「ふふふ、こういう事よ。貴方の運命を変えた。ただそれだけの事」

「お前…、よくも…！」

「アンタだけは許さない…！」

仲間の一人がやられたのに対し、怒りが彼女2人を包む

「うぐ…」

「アンタ、じつとしてなさい！私達がアンタの仇を取るから」

「そうだぜ、動いたら傷口が開いてしまうぞ？」

「あら、まだ生きていたのね。人間つてこんなにしぶとかつたかしら…？」

3人をあおるレミリア

しかし、この時レミリアは大きな誤算をしていたのであつた

反射を破り、さらにはダメージを与え、生命の危機に瀕した彼の本当の姿を見て絶望するとはレミリア本人もわからなかつたのである

「オマエ…、俺の能力に干渉した擧句反射をぶち破つて弾幕が当たるよう仕向けたのか…！」

「仕向けた？ 言い方がなつてないわね。貴方の能力の一部に私の攻撃が当たる運命にしただけよ？」

「オマエ…。後悔しても知らねえぞ…！」

「後悔するのはどつちかしら？ 神罰 「幼きデーモンロード」 !!!」

さらに激しい弾幕が彼に降り注ぐ

「ぐつ…、俺もここまでか…」

「ふふ、貴方は運命に抗えるかしら？」

「アンタ…！」

「避ける、コウタ！」

そんな二人の声も届かず、激しい弾幕を浴びたコウタはそのまま息を引き取った

「そんな…。アンタみたいな能力でもこんな事があるなんて…」

「レミリアとか言つたよな。お前だけは絶対許さないからな！」

「ふふ、避けないそこの人間が悪いのよ。それに避けたところで確実に当たるのよ？」

運命に抗えず息を引き取つたコウタ

誰もがそう思つたのである

だが：

「うぐ…」

「アンタ、生きてたのね！ つてその目…！」

「ん？ 生きてたのか？」

「魔理沙、今アイツに近づけば大変な事になるわ」

「なんでだ？」

「目の色が紅いし、それにアイツの腕…」

「なつ…!? まさか…」

「あら、死にぞこないがまだ生きていたのね。面白いわ」

（まざいわ…。これじや私と魔理沙が巻き添えになるわね…） 「魔理沙」

何かを悟った靈夢

「どうした？」

「一旦引くわよ」

「え？ 何でだ？」

「いいから！」

「あら、貴方達二人は薄情なのね。コイツを殺すけどいいのかしら？」

「ええ、いいわよ。アンタが生きていればの話だけどね」

「お、おい霊夢…。こいつを見殺しにするのか？」

(違うわよ。アイツは暴走状態になつたのよ。もしここにとどまれば私たちまでやられるわ)

(そういう事か…)

「…どういう意味かしら?」

「そのままの意味よ」

そう言い、二人は一時撤退をする

(あの巫女が言つていたわね。「アンタが生きていれば」って。ふふ、ますます面白くなつてきたわ)

「ククク…、面白そうな姿になつてるじゃないの。人間」

「・・・・・・・・・・」

レミリアの前に姿を現したのは先ほど無数の弾幕を浴びせ、絶命したはずの青年が立つていた

服は破れ、眼は紅く染まり、さらに右腕が変異し、手だと思われる部分からは鋭いツメが生えている

「…何もしないならこっちからいくわよ!」

レミリアはツメを生やし、高速で接近して彼の首筋を狙い、切り裂こうとしたが彼の

右腕ではじき飛ばされる

「かは……！」

壁にたたきつけられるレミリア。そしてそのまま脇腹を変異したツメで突き刺す
「うぐあーぐ…、貴様…！」

無言で突き刺したままさらに奥深くツメを食い込ませる

「あああああああ！　ぐふつ・・・・！キサマ…！」

そして、ツメで脇腹を切り裂く

「つ！！」

脇腹を切り裂かれ、もはや致命傷ともいえる傷を負わせた彼だが、それでも攻撃をやめることはなかつた：

「いや…、やめて…、こないで…」

もうカリスマの面影もないレミリア。上半身だけになつた彼女はどうどう命乞いをするも彼女に近づく

ザシユツッ！！！

なんと、レミリアの首を刎ねたのである

その頃、八雲邸では

「あの子は今頃何をしているのかしら…」

「彼の事が気になる紫

「少しスキマで覗いてみましようか」

スキマで彼らの様子を覗く

「さて、どんな状況な…？」

紫が見たものは、かつての姿の面影を残しながらも右腕が変異し、眼は紅く染まつた
コウタの姿が

「ああ…、そんな…。貴方…」

まるで殺害を楽しむかのような彼の姿に紫は呆然とする

「こうしちゃいれないわね」

そして、彼の元に向かうのであつた

レミリアが殺害される数分前の咲夜視点では

「やはり致命傷を…。お嬢様も少しばかり減したらどうかしら…」

柱の死角に身を潜め、彼の行動を見ていたのであつた

「魔理沙！一旦引くわよ」

「あら、貴方達二人は薄情なのね。コイツを殺すけどいいのかしら？」

「ええ、いいわよ。アンタが生きていればの話だけどね」

え？ どういう意味？

お嬢様が私の大切な人を殺す…？

それに博麗の巫女…、彼を見殺しにする気なのね…！

レミリアと靈夢の会話を聞いていた咲夜に怒りの感情が増す

・・・ そういえば彼はあんな事言つてたわね

（俺が本気で戦つてそのお嬢様に瀕死の重傷を負わしても咲夜は絶対加勢すんなよ？ 俺は咲夜を殺したくもないしましてやその時は俺の能力が暴走してるからな）

私は何も出来ずただ指をくわえてみてているだけなのかしら…・・・

私の主人はお嬢様、けど大切な人が主人のお嬢様に殺される…

私はそれを黙つて見ておけという事…？

けど

（俺は極力殺さない方針で戦う。ただ吸血鬼なら簡単にくたばらんやろ？）

そう言つていた彼が殺される…！

私はどうすれば…

「咲夜…、聞こえるか…？」

「貴方？ 貴方なの？」

「そーや。俺の姿を見て咲夜もわかつただろ？ 俺はもうじき俺でなくなる。能力の暴走

能力の暴走

が起きる…」

「貴方…」

「咲夜、今すぐここから出ていけ。時間を止めてるけどそろそろ限界や…」
警告にも、そして懇願しているように見える

「けど…」

「はやくいけ…！」

「…わかつたわ。お嬢様は吸血鬼。だから首を刎ねようが体を二つにしようがお嬢様は死なないわよ？」

「…わかつたから行け」

「…必ず元の姿に戻つてくださいね？」

(俺はもう限界や…。意識が…)

そう言い、その場を後にする咲夜であつた

そして

「ひつ…！」

ザシユツッ!!!

無言でレミリアの首を刎ね、さらにレミリアの胴体から噴き出る血液を飲む彼
ああ、アナタ…。いつからそんな子になってしまったのかしら…?

「・・・・・・・・」

声のする方向へ振り向く彼

「アナタ…。私が誰だかわかる…？」

悲痛な声で問い合わせる紫

しかし、今の彼に紫の声は届かず、ただ目の前の敵を殺害するだけのバケモノと化し

た彼の姿

「・・・・・・・・」

無言で紫に近づくコウタ

そして

グサツ!!

紫の腹に一突きしたコウタ

「アナタ…。私の血を…、飲んで思い出して…」

本能のごとく、紫の腹から流れ出る血を飲む

そして

「うつ…！」

彼の姿は変わらずだが
「ゆかり…？ 紫なのか…？」

自我を取り戻したのである

「俺はいつたい…」

「アナタ…」

優しく彼を抱きしめる紫

「この腕…。 そうか、とうとう暴走しちまつたのか…」

変異した腕を確かめ、暴走していたのだと確信する
「紫、俺、あの吸血鬼と戦つて弾幕を浴びた後記憶が無いんよ。 それにあの転がつてるのはなんだ？」

レミリアの亡骸を指さし、紫に問う

「あれはアナタが暴走してあの吸血鬼を殺したのよ」

「そうか…。 やっぱりくでもないな、俺の能力は…」

「貴方、勝手に私を殺さないでくれる？ それとその腕どうにかしなさいよ…」
突然、レミリアの頭が話しかけてきた

「うわ、化け物…！」

「化け物は貴方よ！ 私をこんな姿にさせて…！ どう責任取るつもり？」

「あらあら、楽しそうな雰囲気が出てきたわね」

「どこがよー（じやー）！」

「ふふ、ではごきげんよう！」

（アナタ、私の血を飲んだからには暴走しても制御出来るわよ？）

（そーか、ありがとうな！）

スキマへと入り、そのまま帰った紫

その後

「お嬢様！生きていたのですね……！」

咲夜までもが突然姿を現す

「なっ！オマエ、出ていけってゆーたはずやんけ！なんでここに……？」

「お嬢様があんな姿になつて私は足がすくんでました……」

「そーか」

「ちよつと！私の事は無視？」

「うるせえ！変異している腕で串刺しにするぞ！」

「ひつ！いや……！」

もうカリスマはどこへ行つたのか、すっかりコウタにおびえてしまつたレミリア

「せや。オイコウモリの頭。この空を戻すんやろうな……？場合によつちや全部串刺しにして天日干しにするぞ！」

「いや……！そんな事されたら私死んでしまう……！」

すっかりおびえきつたレミリア

「貴方、さすがにお嬢様がかわいそうですよ…」

「貴方、お願ひ…。私を元に戻して…」

今にも泣きそうな顔をするレミリアの頭

はたから見ればホラー以外なんとも言えない状況である

「はあ…。しゃーないな…。次こんな事やつてみろ。これだけじや済まんからな?」

「わかつた…、約束するからあ…！」

「あの、貴方? 美鈴のようにならないでくださいね?」

「それは俺の気分」

「美鈴がどうしたのよ」

「俺が内部から破裂させた。オマエにもやつてええんやぞ?」

「ひい…! そんなのやだあ…」

はたから見れば弱い者いじめにしか見えない

弱い者いじめを通り越してホラーにしか見えないけど

「胴体どこやつたつけ…? あ、あつた。せやけど掴む所ねえな…」

レミリアの胴体を掴むが、明らかおかしなところを掴んでいた
「ちょつ…! な、何で私の胸を掴んでいるのよ! …・・つ／＼」

「何これ、フニフニしてへんし布の感触しかせーへんで？咲夜も触つてみるか？」

「咲夜、触つたらどうなるかわかつてんでしょうね…！」

「おう、俺の大切な人を脅すんけ？目ん玉くりぬいたろかコラ」

「ひつ…、わ、わかつたわよ…！」

「じ、じやあ失礼します…。あ、貴方の言う通り布の感触しかしないですね」

「せやろ？直接触つてみるか？俺が許可する」

「はい…！あつ、冷たくてフニフニします…／＼／＼

「マジか、俺も…。すげえ、咲夜の言う通り冷たくてフニフニしどるわ」

犯罪まがいな事をしているコウタ、そして咲夜の一人である

「うえええええん！」

とうとう泣き出したレミリア

もう不気味なのがカオスなのかわからない状況である
そして

「もうお嫁に行けない…。貴方、責任取りなさいよ！」

「俺はちつこい子と結婚する気はないからな」

「なにを！私はこう見えても500歳なのよ！」

「んな歳で仮に結婚しても子供なんざ産めるかボケ！」

「そうですよ、お嬢様！いくら何でも吸血鬼と人間が結婚出来る訳ないでしよう？そもそも私なら…」

「せやぞ！オマエ頭と体分離して頭おかしなつとんのちやうか？」

「貴方のせいよ！」

「黙れチビコウモリ」

「殺す」

「やれるもんならやつてみろ」

「ひつ…、その腕見せないで…！」

「にぎやかね。レミイも嬉しそうにしているわ」

「そうですね、パチュリー様」

「おう、パチュリーと小悪魔か。あのチビコウモリ俺に責任取れだの結婚しろだのうるせえんだよ…。どーにかならんか？」

「あら、レミイは貴方の事を気に入ってるのよ？」

「そうですよ、お兄さん。お嬢様はお兄さんの事話していくたりしてたんですから」

「そーか。つかパチュリー、オマエあのチビコウモリの歳いくつや思うてんねん。 50
0歳やぞ？しかも吸血鬼。んで俺人間、23歳。歳の差結婚にも限度があるわ！」

「そういえばそうね…」

「せやろ…。咲夜と結婚して幸せに暮らしたいわ…」
「わ、私と結婚…？あうう…／＼／＼

（小悪魔のスタイルもええし、パチュリーのスタイルも見る限り隠れ巨乳の可能性が…、いや、美鈴はどうだ？あのスタイルも中々…、咲夜のスタイルも俺抱いたからわかるんだよな…。チビコウモリのスタイル？ガキじやねえか…）

いつの間にか異変も解決し、フレンドリー（？）になつていたのである

博麗神社・縁側

「なあ靈夢」

「何」

「私たちの出番はこれで終わりなのか…？」

「終わりじやないわよ。アイツの事だからきつとまた私の神社へ来るわよ」

「なんだ、靈夢。もしかしてあいつの事が気になるのか？」

「そうじやないわよ！でもアイツの能力は気になるけど…」

「やつぱり気になつてるじやないか！私もあいつの事気になつてるからな」

「へえ…」

「な、なんだぜ？」

「何でもないわよ」

紅魔館・???

「どうしてあんなに楽しそうなの…？私もあの中に混ざりたい…。お姉様のバカ…！ユルサナイ…！」

「よう、何か大きなモン抱えてそうな雰囲気駄々漏れやんけ」

「お兄さんは誰…？」

「俺か？俺はコウタ。能力はあらゆる物体を反射する程度の能力、複製する程度の能
力や。自分は？」

「私はフラン。フランドール・スカーレット」

「…あのチビコウモリの妹か？」

「そうだよ？どうしてわかつたの？それに何でそんなに服が破けてるの…？」

「自分がお姉様つて呼んでたからわかつたんよ。服？直すの忘れてたわ…」

「じゃあ、その右腕は何？」

「…能力の暴走」

「ふうん…。ねえ、一緒に遊んでくれる？」

（これはまた暴走するかもな…）

To be Continued

第五章・紅霧異変収束（昨日の敵は今日の家族）

とある関西人の幻想入りPart9（幻想郷での異変⑦）

紅魔館・地下室

「どうしてあんなに楽しそうなの…？私もあの中に混ざりたい…。お姉様のバカ…！ユルサナイ…！」

「よう、何か大きなモン抱えてそうな雰囲気駄々漏れやんけ」

「お兄さんは誰…？」

「俺か？俺はコウタ。能力はあらゆる物体を反射する程度の能力、複製する程度の能
力。自分は？」

「私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ？」

「…あのチビコウモリの妹か？」

「そうだよ？どうしてわかつたの？それに何でそんなに服が破れてるの…？」

「自分がお姉様って呼んでたからわかつたんよ。服？直すの忘れてたわ…」

（チビコウモリで通じやがった…）

「じゃあ、その右腕は何？」

「…能力の暴走でこうなった」

「ふうん…。ねえ、一緒に私と遊んでくれる?」

(あーあ、これはまた能力が暴走するかもな…。とんでもなく嫌な予感がする…)

かくして異変が解決した事で、紅魔館の探索をしていたコウタは地下室で一人の少女・フランドール・スカーレットに出会う

「ふふふ、壊れないでネ…?」

(まずい…!)

とつさに避けるもさらに弾幕がコウタを包む

「禁忌「カゴメカゴメ」!!!」

弾幕がコウタを囲うようにした直後、大玉の弾幕が彼を目掛けて飛ばす

「こんなんアリかよ…。けど、俺に弾幕は効かん! 暴技「暴君の腕」!!!」

そう、新しくスペルカードという物をコウタは発動させた暴君の腕(タイラントアーム)でフランの弾幕を振り払い、そのままそのスペルカードで全て受け止め、相手に返す

「アハハ! 面白い♪ねえねえ、もつと遊ボ?」

(とんでもなく嫌な予感が…)

「ふつ、飽きるまで遊んでやるよ…!」

「禁忌「フォーオブアカインド」!!!」

なんと、フランが4人になつたのである

「「「「フフフツ♪もつと遊んでくれるよネ…?」」」

（反則だろオイ…）

「1対4とか何考えてんねん…」

4人に増えたフランの攻撃はさらに激しさを増す

「こうなりや…、反射技「反壁ノ舞」!!!」

再びスペルカードを使用、さつきとはまた別のスペルであり、反壁ノ舞（リフレクションダンス）全てのスペルカードおよび攻撃はもちろん、強化状態、特殊状態を解除させるスペルカードである。もはやいてつく波動とマホカンタ、アタックカンタを全て足して3で割った技である

「「「あつ…」」」

元に戻されたフランに怒りがこみ上げる

「なんで…! なんで私のスペルカードを解くの? もつと遊んでくれるんじやなかつたの!
！」

「1対4なんざ相手出来るかボケ」

「…つ！」

ボケ呼ばわりされたフランに異常が起きる

「…さない」

「ア？」

「許さない！私の事をボケ呼ばわりして…！」

「…・・・・・」

「ユルサナイ！」

「はあ…」

狂気に染まるフラン。そして

「全部コワシテヤル…！」

「…！」

バキイイイン！

コウタの反射を破壊したのである

「なつ…！オマエ…」

「やつぱり…。私の攻撃がはね返されるのはそれがあつたからなんだ…！」

反射を再び破られ、困惑する

「ふふつ♪それが無いから私と同じ状況だね、オニイサン♪」

「くつ…！」（また暴走してこんな状態の子を殺しちまう…。俺はコイツを助ける…！）

反射を無くした彼は丸裸同然。フランの攻撃が当たれば即死は免れない

「オイ、フランだつけか」

「何？命乞いするつもり？」

完全に殺す。そんな感情が彼には見えた

「俺を殺す前に少し話をしようや。話が終わつたら俺をここで殺してもいい」

眼は紅く、しかしかのレミリアを瀕死に追い込んだ眼差しではなく、純粹な眼でフランに話しかける

この時フランの狂気が收まり、純粹な眼でコウタを見つめ、返事をする

「なあに？」

「まず一つ。俺はオマエの実の姉を殺害寸前まで追い込んだ。原因は俺の反射を破つたからだ。二つ。フランはいつたいここにいつからおつた？半年やそこらでそんな状態にはならんはずや。俺にはわかる。なんせ俺もフランと同じ状況になつた事があるからな。まあ、ほんの数年やけど。三つ目。オマエの眼を見てたら不思議に思う。なんでそんな目と顔で戦う？」

まるでフランに自身の一部の出来事を語りかけるように話す

「…ねえ、お姉様はもう死んじやつたの？」

「心配すんな、ピンピンしてギャーギャーうるさくしてる」

「そう…。でもなんでお兄さんの反射が無くなつてお姉様を死の寸前まで追い込めたの

？」

「それはな、俺の能力にはちと厄介な副作用があるからや。生命の危機に瀕したから能力が暴走し、あのチビコウモリを瀕死に追い込んだ。聞いた話俺がそうなると見境なく誰彼構わず殺害するらしい……」

「…………」

（私と少し似てる……？私は昔に化け物呼ばわりされたのに……）

淡々とフランの質問に答えるコウタ

「それと、私は495年もここに閉じ込められてたの……」

「495年？オマエ、生まれてすぐにこんなとこに放り込まれんたか？」

（半年や1年のレベルじやねえ……）

「うん……お姉様がここに閉じ込めたの……」

「あのクソコウモリ……、実の妹やのに何考えてんねん……！」

不思議と彼は怒りがこみ上げる

「ううん、私が悪いの……。私の能力はありとあらゆるもの破壊する程度の能力なの」

「…………」（俺と正反対の能力やな……）

彼女の能力によつて反射を破られたのと確信した彼

「私だってお姉様や咲夜達と一緒に過ごしたい！なのに……」

「もういい、状況とオマエの思つてる事は全部俺が理解した」
「…え？」

「なんべんも言わせんな。フラン、オマエはアイツ等と一緒に過ごしたいんだよな？」
「うん。けど私ね、昔に化け物呼ばわりされたの…」

「は…？誰に」

「わかんない…」

かつて化け物と呼ばれたフラン。現在進行形でバケモノのコウタ。

彼は悟った

（コイツにはこれ以上辛い気持ちにはなつて欲しくない。俺が何とかしてやらねえと）
「フラン」

「何？お兄さんまで私の事化け物つて呼ぶの…？」

「呼ばねえよ。フラン、もしオマエがよけりや俺と一緒に外に出るか？」

「え？でも…」

「でももへちまもねえよ。フラン、正直に全部ここで言いなよ。俺が全部聞く」

コウタの意外な提案に半信半疑ながらも現在の気持ちを彼にぶつける

「私だつてお外に出たい…！お姉様と一緒に遊びたい！もうこれ以上一人ぼつちは嫌…

！」

フランは禁忌「レーヴアテイン」を発動させ、コウタにぶつける

「ぐうつ！そーや、そーやつてオマエの思つてる事を俺にぶつけろ……」

明らかに直撃しているのにも関わらず、まるでフランの思いを受け止める姿勢で仁王立ちする彼

「ねえ…。お兄さんが初めてだよ…？私と対等に話してくれたのは」

「そうか…。スッキリしたか？」

「うん…。でも、私みたいな化け物がお兄さんと一緒に外へ出てもいいの…？」

「ええかげんにせえよ？もうオマエは化け物でも何でもねえよ。俺が保証したる！だから、俺が責任持つてオマエと一緒におつてやる！オマエが暴走しそうになつたら俺が止めてやる！そんなけ思つてる事言えるオマエは化け物じやねえ！もしオマエの事を化け物呼ばわりする奴がおつたら俺が代わりにソイツを壁のシミか肉塊に変えてやる！約束じや！」

「…！ほんと？約束してくれるの…？」

「ああ、約束する」

「私はお兄さんのそばにいてもいいの…？」

「ああ、飽きるまでおつてもええ」

「お兄さんは私のそばにずっといてくれる…？」

「ああ、オマエが飽きるまでおつてやる」

「…！ううつ、うええええん！」

そう言い、コウタは優しくフランの頭を撫で、フランは泣きながらコウタに抱きつい
た

こうして、本当に紅霧異変は収束を迎えたのである

数日後

「お兄様♪♪」

「ぐえ！飛びかかるなよ：。反射してたらどないすんねん」

毎日のようにつランに飛びかかられ、そのまま抱きつかれるコウタ

「お兄様は私の事を反射するの…？」

「アホか。せーへんつての」

「えへへ♪ねえお兄様？」

「ん？」

「大好き♪」

「ん…」

そう大胆に言われ、ただただフランの頭を撫でるしか出来なかつたのである
その日の夜中

「お兄様…、お兄様…」

「ん…、なんや、フラン」

「一緒に寝てほしいの」

「さすがに一人で寝ろよ…」

「私と一緒にいつでもどこでもずっとそばにいてくれるんじやなかつたの…?」

「わーつたわーつた。布団に入れ」

(一緒におつてやるとは言つたけどどこでもとは言つてへんのやけど…。ま、ええか。

コイツが幸せなら)

「わーい♪」

なぜかその後、一夜を明かしたのである

曰く「なんであんなことに…」

紅魔館・レミリアの部屋

「ねえ貴方」

「なんや?」

「ちゃんとフランの面倒を見てる?」

「見どるよ。いつでもどこでもべつたりくつつくから嫌でも面倒見てる」

「そう、それならいいわ。それと貴方の部屋が出来たわよ」

「そうか。ありがとうな、レミリア」

「べ、別に貴方が住む所無いから作つただけよ？」

「はいはい」

この頃よりコウタは紅魔館に住むことになつたのだ

フランが彼になつており、レミリア曰く「フランの運命は貴方が紅魔館に住んで貰わないとフランがまた暴走してしまう」との事

これに対しコウタは「アホか、最終判断はアイツや」

そう言い、レミリアは反論する

「いい？ 貴方がいなくなればあの子はまた一人なのよ？ それに貴方にずいぶんなついてるみたいだし…」

「オイ、平たく言うたら俺はフランの歯止めか？」

「そうよ。それに私も貴方の事を気に入ってるのよ」

「そーか」

「そういう事。じゃあ改めて…。ようこそ、我が紅魔館へ。貴方を私の家族として歓迎するわ」

「ふつ、たまにはオマエのその姿も悪くねえな。俺こそ改めて…。こんな俺を住まわしてくれてありがとうな。感謝するよ、レミリア」

(案外この暮らしも悪くねえや。後で紫に伝えないとな。新しく住む所が出来たつて)
 (ふふ、見てたわよ♪アナタなら大丈夫。吸血鬼の妹の事をしつかり見てあげなさい。
 近々アナタに面白いことが起るわよ)

こうして彼は紅魔館の住人の一人になつたのである

紅魔館・大浴場

「ふい♪。湯船最高！つか広すぎ」

すると

「「「お兄様♪！」」」

バタン！と勢いよく扉を開けて大浴場へと入るフランとフランの分身達
 しかもそろいもそろつてすっぽんぽんである

「オイ、フラン！いくら何でも風呂を一緒に入るとは言つてへんぞ！」

「「「え・・・」」」

しょげた表情で声を発するフランと分身達

「…わかつた。好きなようにしてくれ」

「「「わーい♪」」」

「じゃあ私はお兄様の頭と背中を洗うね♪」

「私は体を♪」

「私は腕を…」

好き放題するフランを見たコウタは
 （コイツら俺とおる時だけは幸せそうにすんねんな）。この前俺がババしてる時に凸られたのは焦つたわ…。さすがにあれは俺も怒つたけど）

「つかさ、何で4人になつた？」

「「「んく、何となく？」」」

「そーかい…」

フランが幸せそうならいいやと思い、身体を洗つてもらつたコウタは再び湯船に浸か

る

そしてフラン達も同時に浸かる

紅魔館・大浴場前脱衣所

「オイオマエら、じつとせんかい！頭乾かすぞ」

「「「キヤツキヤツ♪」」」

はしやぐフラン達

それを見ていたレミリア達は

「フランが幸せそうで何よりね」

「そうね、レミイ」

「妹様があんな元気に…。これもあの人のおかげですね…」

「咲夜？もし彼がいなかつたら今頃あの子は…」

「ですね、お嬢様…」

こうして平和な日々が続くのでした

To be Continued

第六章・化け物とバケモノが重なり合うとき、新たな感情が芽生える（紅霧異変篇・完）

とある関西人の幻想入りPart10（紅魔館での日常

①)

ある日

「あーあ、暇や…」

そうつぶやくのは先日正式に紅魔館の住人となつたコウタである

「フランも…」

「「同じく…」」

毎日のように彼に引っ付いてるかの如く行動するフランとフォーオブアカインドで

分身したフラン達

「暇だからお兄様にくつつく♪」

「「私も…！」」

「オマエらくつくなー身動き取れんくなる！」

「「「うー…」」」

フラン達はそろいもそろつて姿勢を低くし、頭を守るかのような行動を取った
俗にいうカリスマガードである

彼曰く「俺のせいなのか…？しかもシユールすぎて笑う」と
何せ変異した右腕を出した原因でフラン達はかのポーズを取つたのだ
「はあ…。それにしても見事なまでに暇やな…」

「「「だね…」」」

「てか元に戻れよ…」

「うー…」

しゃーなしと言わんばかりに元に戻るフラン

「んで、何するか思いついたか？」

「うん！面白い事思いついたよ！」

明るい声で返事をするフラン

「何するんや？いたずらか？」

冗談のつもりで聞いたコウタに対しフランは

「うん！お兄様と一緒にいたずらするの！」

（オイ俺まで巻き添え喰らうやんけ…）

「せやけど誰に対してやるんや？咲夜か？パチュリーカ？それともチビコウモリにか

？」

「うん！そうだよ～」

（俺時止めて部屋から出ていいかな？30秒もあれば十分やろし）

「まず咲夜にいたずらするの」

「なんでまた…」

「昨日咲夜のおやつを私が食べたの。それで怒られて…」

「それただの逆恨み！しかも食ったフランが悪いしそら咲夜も怒るわ…」

咲夜のデザートをつまみ食いしたことによつて怒られたフランが咲夜を標的にする完全逆恨みそのものである

「せやけどどうやつて仕返しするんや？俺も手伝うで？」

「わーい♪でも何でお兄様まで？」

普段のコウタならこんな事はやらないが、今回はやけに乗り気である

「実はな…」

遡る事2日前

フランを寝かせたコウタが手伝いを終わらすために食器洗いをやつていた時である

「はあ…。何枚あんねん」

「貴方？文句言つてないで終わらせなさい」

「はいはい」

眠そうな声で返事をした彼に対し咲夜は

「なんですか、その態度は」

「ア？」

「ア？ ジやないです。貴方ねえ、今の状況がわからないのですか？」

突然咲夜に怒られた彼は咲夜に言い返す

「ただ手伝つてるだけやのに何で怒られなあかんねん」

「手伝うにしても私の前では仕事と同じです。文句言う暇があれば手を動かしなさい」
 （コイツ…。手伝つてるだけやのにえらそうにしやがつて…！）

「チツ」

「今舌打ちしましたか？」

お互いのイライラは頂点に達していた

「そーや、したよ。文句あるんけ？」

「何て口の利き方…！ いいでしょ。その減らす口を叩けなくしてあげます…！」

「やれるもんならやつてみい！ 生理中の人が無理しやがつてボケが！」

彼の一言により咲夜の怒りが頂点に達する

「貴様…！」

「来いよ、ボケ」

突如変異した右腕で戦闘態勢に入る彼

しかし

「うるさいよ～…」

フランが騒ぎを聞き苦情を申し立てた

「フランか…。悪い、咲夜と話をしてたんや」

「お兄様？ 何でここにいるの…？」

実は寝かす前に一緒に布団へ入っていたがフランが先に寝た為、残りの手伝いを終わらせて寝ようとしていたのである

「すまん、オマエを寝かした後も山ほど残つてるもんがあつてな…。後で戻るから先寝とき」

「え、やだ

フランは彼と一緒に寝たいのだろう

「必ず戻るから

「やだ…」

狂気を感じ取ったコウタは

「わかつた、戻ろか

「うん！」

（オイ咲夜、オマエ後で覚えとけよ…！）

小さくドスの効いた声で咲夜に言つた
しかし咲夜は

(ごめんなさい、貴方…。仕事上どうしてもあんな事を…)

小さな声で謝る咲夜に対し彼は

(オマエ明日か明後日湯船にゆっくり浸かつて生姜湯でも飲んどけ。疲れが出すぎや)

そう言い、寝室に戻る

「お兄様…、早く…」

「わーつてるわーつてる」

そしてフランとコウタは眠りについたのである

そして現在に至る

「つーことがあつてな、咲夜を脅かしてやるつて思つたんよ」

「うなんだ…」

2日前の出来事を機にフランと彼は咲夜にいたずらを決行するのである

「どんな事するの？」

「簡単に言えば咲夜が浸かつて湯の温度をクソ冷たい水に変えて、その後50度くらいの温度に戻す」

いたずらと言うより嫌がらせのたぐいである

「私は何したらしいの？」

やる事が無いと思つたフランは彼に何をすべきか聞いた

「ん、俺が熱々の湯に戻した後入浴剤と書いた容器に大量の塩を入れとけ。そしたら身体中塩でベタベタでもつかい洗いなおすだろうよ。んでシャンプーとリンスとボディーソープの位置をどちらに混ぜにするだけや」

もはや嫌がらせである

「でもそれだけじゃ気づかれるよ？」

例え順番を入れ替えても押すところにデコボコがある為それで判断できる

「そこは大丈夫。咲夜は自分が使つた後右からシャンプー、リンス、ボディーソープつて並べてるからそこに細工してくれ」

「どうやつてやるの？」

どこに細工するのかわからないフランは聞く

「シャンプーやボディーソープにはデコボコしたのがあるんや。そのデコボコを取つてくれ」

「うん！その時私の分身も出していい？」

「おう！俺ら5人で咲夜を混乱させよか？」

悪い奴らだ…

その日の夜

「じゃあ、私はシャワーを済ませて来ます」

「しつかり湯に浸かれよ！」

「わかつてますよ」

そう言い、風呂に入った咲夜

（よし、タイミングを合わせて時を止めて水風呂にするから。後は作戦通り行くで）

((((はーい♪))))

この後咲夜はひどい目に遭うとも知らずに湯船に浸かつたのである

（よし、今やな）「複技「ザ・ワールド」!!!」

そして時を止めたコウタは湯船に手をつけ、40度はあつたであろう湯船の湯を0度の冷水に変えたのである

（10秒もあれば十分や。制限時間は30秒やし余裕や）

そして時を戻す

その瞬間

「きやああああああ！」

咲夜の悲鳴が響き渡る

「何事や！」

「何事？」

知らん顔して咲夜の元へ駆けつける彼とフラン
「あ、貴方…。湯船の温度が…」

慌てる咲夜をよそにフランに指示を出す彼
(ええか？30秒以内に作戦通り終わらすぞ？塩を容器に入れてシャンプーとリンス、
ボディーソープの配置を変えてデコボコを無くせ)

（うん！わかつた！）

「咲夜、疲れてんとちやうか？とりあえず待つとけ」（複技「ザ・ワールド」!!!）

そしてフランとコウタ以外の時を止めた

「「「終わったよ」」」

素早く終わらせたフラン達。さすが吸血鬼といった所か

「おう、俺も終わったぞ」

お湯の温度は55度

咲夜のマイ入浴剤には大量の塩

咲夜自身にも少し細工をし、10秒程だが40度のお湯と感じさせるようにしたので

ある

シャンプーとリンス、ボディーソープの順番を入れ替え、細工もした

その間25秒

「よし、戻すぞ」

そして再び元に戻る

「さあ、もつかい湯に触つてみ？」

何も知らない咲夜は湯に触れる

「あ、ちようどいい湯加減です。ありがとうございます。私の入浴剤は…」

「これかな？」

「そうです！ ありがとうございます、妹様」

入浴剤には塩が入っているとも知らずにそのままぶち撒くかの如く入れたのである
「んじや、俺らは出るわー。咲夜の後フランが入るから」

「やだ！ お兄様も一緒に入るの！」

「はあ、わかつたよ」

「わーい♪」

(掃除が大変や…)

そして

「きやああああああ！ 熱い！ 热いいい！」

再び咲夜が悶絶しているのを聞きながらコウタとフランは笑っていたのである

「何よこれええ！ベタベタするわよ！いつたい何なのよもう！」

一人で騒ぎ立てる咲夜を見て二人は腹を抱えて笑っている

悪い奴らだ：

「いやああああ！何でシャンプーのはずなのにリンスが出たりカラシが出たりわさびが
出るのよおお！」

二人は転がりながら笑っていたのであつた

次の日、げつそりとした咲夜はしばらく寝込んでいたそんな
まだまだ2人（時に5人）のいたずらは止まらないのである

To be Continued

第七章・無邪気な二人の暇つぶし（紅魔館の日常篇）

とある関西人の幻想入りPart11（紅魔館での日常

②)

ある日

紅魔館・コウタの部屋（お兄様と私のお部屋）

「あー面白かつた♪」

「「「だね♪」」

コウタとフラン達は悪びれもなく、咲夜に対し行つた行為を振り返る
その咲夜はというと

「うう…。カラシが頭に…。わざびが身体に…、熱いよおお…」

精神的におかしくなつてしまつたのである

「ちとやりすぎたかもな…。ところでフラン」

「なあに、お兄様♪」

返事とともに彼に抱きつく

（もうこのままでいいや…）「俺の部屋の扉にさ、名前書いてあつたよな？横に書いてあるあれ、なんなん？」

ふと思いついたかのよう、入り口に書いてある部屋名について聞く

「お兄様と私の部屋って名前？もしかして気に入らなかつたの…？」

「コウタの部屋」と書いてある横に書き足したかの如く“お兄様と私の部屋”と書いてあるがフランは勘違いをし、気に入ってくれなかつたのかと不安げにうつむく

「いや、気に入らんなんて言つてへんからな？何で書き足した？それだけ教えてくれ」
気が付けば書き足されていたので書き足した理由をフランにたずねる

「あのね、私はお兄様と一緒に居たいの。私の部屋もあるけどお兄様の隣が一番落ち着くの」

（お兄様は私だけの物なんて言えないよ…）

「そーか。そう言つてくれりやええのに…まあいいや、わかつた。飽きるまで俺の部屋で過ごしな」

本当は知つている

フランが好意を向けている事を

しかし現実はそうはいかない

何せ人間と吸血鬼だから…

その日の夜

「ん…、お兄様…」

フランは横で寝ているコウタをじつと見つめ、小さな手で彼を抱きしめる

「お兄様は私だけの物ダヨ…? ドコニモ行カナイデネ?」

そして彼女はコウタの首筋を噛み、そのまま血を吸つたのである

その瞬間から彼は吸血鬼と同じ寿命を得るのだつた

次の日の朝

「ん…、首がチクチクするんやけど」

首に違和感を感じた彼は鏡を見る

そして

「…フランだな。俺に噛みつきやがって」

文句と悪態をつきながらもフランの寝ている姿を見たコウタは

「まあ、フランが俺と一緒におつて幸せならええか…。この状況を潰しにかかる輩は全員殺す」

眼は紅く光り、右腕は変異し、手からはするどいツメが生えていた

紅魔館・廊下

「咲夜の様子でも見に行くか…。やりすぎたからあの後どーなったのか俺知らんし。気になるけど」

咲夜の部屋へ向かう彼はそうつぶやきながら扉前に着く

「オイ咲夜、入んぞ」

部屋へ入ったコウタは、咲夜の変わり果てた姿に呆然と立ち尽くす
髪の毛はボサボサになり、目は虚ろで不気味な笑みを浮かべたその姿はまるで廃人の
ようである

「咲夜…やんな？」

虚ろな目がこちらを見る

「あなた…、あなたあ…！」

「フラフラとこちらに近づき、そのまま彼を押し倒す

「アナタ…、アナタ…！」

「んむぐ…！ちゅる…」

強引に深くキスをされ、そのまま行為をしたのである
次の日

「おはようござります。妹様、あなた、朝食の時間です」

前日の夜の事をまるで無かつたかのように二人を起こす咲夜

「ん…、お兄様、朝だよ？」

「あ…、眠い…。朝飯は抜きで」

朝に弱い彼は二度寝をしようとする

「何を言つてゐるのですか？毎日朝食を取らないと体調崩しますよ？」

“お前は何を言つてゐるんだ”と言わんばかりに反論するコウタ

「咲夜、オマエここ数日寝込んでたやろ？寝込んでた人間に言われても説得力の欠片も見当たらんぞ」

（ゆうべの事は黙つてお…）。フランが発狂しかねん…）

「もう治つたんですから。さあ、お嬢様がお待ちです」

「へーへー」

少女達移動中＆食事中…

「私のシーンは？」

「食事中は静かにするもんや。それくらいわかれやクソガキ」

「なんですって!?」

「いちいちうるせえんだよチビコウモリ」

「殺す」

「やつてみろや」

「ひつ…！」

食事中は静かにしましよう

紅魔館・パチュリーの部屋

「ようパチュリー、生きてるか？」

「毎回貴方はふざけないと生きていけないの？」

「毎日図書館にこもつてゐる人間に言われとうないわ」

「私人間じやないんだけど」

「いちいち揚げ足取んなやひきこもり」

「なんですつて?!もういつぺん言つてみなさい?」

「なんべんでもゆーたるわ、紫もやし」

「殺す」

「やつてみろや」

「ひつ……その腕見せないで…。私トラウマなのよ…」

罵詈雑言が日常会話なコウタとパチュリー

はたから見れば仲が悪いように見えるが、お互い信頼しているのである

「せや、こあに呼ばれて来たんやつたわ。こあ? 買い物行くんやろ? フランも連れて行

くから」

「お兄さん、妹様は吸血鬼なのですよ? 日傘が必要なのでは…?」

「いらん。俺の能力でどうとでもなる」

能力つてすげーな

「じゃあ私は寝ておくから。夜になつたら起こしに来て」

「へーへー」

少女達移動中…

「こあ、作戦通りでいくで？ フランも」

「「「うん♪」」」

「はい！」

「こあはさんざん使い倒されてストレス発散、俺は逆ギレされた恨み、フランは何となくか…。まあ、壊れんように限度をせなあかんな」

「お兄さん、図書館の本棚の配置を変えるんですよね？」

「せやで。当初は本の入れる向きを全部逆にしてやろうかと思つたけど時間が足りないから配置変更してやるんや」

当初本の背表紙と開ぐ方を全て逆の方向にしようかと思つたが、時間不足の為配置変更らしい…

何があつてパチュリーにいたずらしようとしているのか…

それは紅霧異変解決後の事である

「あら、貴方。その本私によ？さつさと返して出て行つてちょうどいい」

「返すわこんな読みずらい本なんざ。壁も修理して本も取り返したつてのになんやねん
その態度は」

本を魔理沙から取り返し、破壊された壁を修理し、さらに強化したことによってたとえマスター・スパークを撃たれてもびくともしないように改修したコウタに返ってきた言葉はありがとうでもなく、恩を仇で返すような言葉が返ってきた

当然彼は青筋を立てる

「こあ、早くこの人間を追い出してちようだい。目障りなのよ」

こめかみがピクッと動いた彼

レミリアが今、彼の姿を見ればきっと失神するであろう
なにせ変異した右腕を露出し、眼は紅く光り、殺氣を放っている

「コ 口 ス」

「やつてみなさい。日符「ロイヤルフレア」!!!」

突然巨大な火球がコウタを包む

しかし

「・・・・・」

あの時レミリアを圧倒した時と同じく、無言でパチュリに近づく
「…! パチュリ様!」

突然目の前に小悪魔が立ちふさがる

「こ、ここからは私が相手します！パチュリー様には指の一本も触れさせません！」
しかし、目にもくれず小悪魔をスルーしていく
裏拳を小悪魔に当てながらパチュリーに近づく

「…？魔法が効かない…？」

そして圧倒的な力でパチュリーをねじ伏せたのである
彼曰く「あの時の記憶？無けりや今頃パチュリーと小悪魔はもれなく壁のシミやで
？」と

「むきゅ…」

「パチュリー様…」

2人そろつて意識が飛んで行つたのであつた

そして現在に至る

「つて事が以前にあつてだな」

「な、なるほど…」

小悪魔もこの人を敵に回したり怒らせたらひどい目に遭うと感じた瞬間である

「でも、どうやつてパチュリーに仕返しするの？」

「ん？ アイツが寝てる間に本棚にある本という本を全部逆さに置いてやろうかと思つた

けどな

それだと時間がかかるのは確実なのである
すると小悪魔がある提案を出す

「ではこうしましよう。お兄さんが時間を止めてその間に私と妹様で本棚の位置を魔法陣のように入れ替えるのですよ」

小悪魔もきっとストレスが溜まっていたのだろう。その笑みは不気味に微笑んでおり、目は笑つていなかつたのである

「ほな、そないしよか。フラン、また分身作つて今度は俺どこあ含め6人で協力やな。やる時間は夜でええか？」

「「「うん！」」」

（早すぎるわ…）「おつけ、こあもそれでええな？」

「はい！」

こうしてパチュリーの寝床および図書館は本棚の位置が勝手に変更され、さらに大惨事を引き起こすキツカケにもなるのだが、紅魔館組は全員知らなかつたのだ

超爆発を起こす魔法陣とも知らずに…

少女達移動中…

「スヽスヽ…」

パチュリーは完全熟睡していたのである

「オイ、音を立てるなよ？」

「「「」」つちだつたよね？」」」

「妹様、そつちじやなく」」です」

着々と本棚の位置を魔法陣型に入れ替える

パチュリーを囮うように

「おし、こんなもんやろ。つか眠い…」

「うん！ お兄様、早く寝よ？」

「お兄さん、この後はどうします？」

「知らん顔しとけ。ほんで普通にふるまえよ？俺らは寝るから」

こうして、魔法陣型に入れ替えた彼らは次の日大惨事になることも知らず、そのまま解散したのであつた

次の朝

「きやああああああ！ 何よこれ！」

パチュリーが悲鳴を上げる

「なんや！ どないしたんや！」

「「「うー…」」」

しがみついていたフラン達を引き剥がし、パチュリーの元へ駆けつける
「いてて…、うわなんやこれ」

目にした光景はまるでパチュリーを囮うかの如く、綺麗に本棚が並べられていた
やつた本人は知らん顔している
悪い奴だ

「ああ…、むきゅ…」

「オイ大丈夫か？」

「貴方…、今すぐ逃げたほうがいいわ」

「なんでや！何が起こったんや！」

パチュリーは本棚の並びを見て深刻な表情でコウタに避難を促す

「この並び、そして魔導書を直してある本棚…。この館は大爆発を起こすわ。そもそも
うすぐに」

「何ならばよ逃げなあかんやんけ！パチュリー、掴まれ！」

「きやあ！ ちよつ、放しなさいよ！」

「アホ言うな！ オマエ走れるんけ？ 無理やろ？ こうするしかないんや！」

（えらい事してもうた…）

後悔しつつも今助けるべき人を避難させた彼は安堵するが…

「しまつた、レミリアとフランと咲夜が！」

「心配ないわよ、貴方」

振り返ると、レミリアが立つており、隣には日傘を持った咲夜がいたのである

「おお、いつの間に…。てかフランは？」

「「「」」」だよ～」」」

分身したままコウタの真横にいたのである

「はあ…、寝るわ」

「ここは地面ですよ、あなた？」

そのまま寝ようとしたその時

紅魔館から凄まじい轟音が聞こえ、やがて地割れでも起きたかのように地面が揺れ、

そして紅魔館は跡形もなく崩壊したのだった

全員その光景を見て呆然と立ち尽くすしかなかつたのである

「私の館が…」

「お兄様の部屋が出来たところなのに…」

「私の書斎が…」

「お嬢様との思い出が…」

「パチュリー様…」

「ああ…、申し訳ありませんお嬢様…。私が敵の侵入を許したばかりに…」

6人は立ちすくんでいたのである

「オマエら、こうなつてしまふたのは何とも言えん。せやけど俺ら全員で出来ることをやろや」

彼の一言で皆がうなづく

こうして、紅魔館復旧をすべく、紅魔館の住人は日々奔走するのであつた

To be Continued

第八章・いたずらも程々に（紅魔館の日常篇）